

# 第26回 ACEF STUDY TOUR



Bangladesh 寺子屋訪問  
2004年3月12日(金)~19日(金)

あの一週間、  
それぞれのメンバーが、  
それぞれの感性で  
感じ、考え、  
それをシェアしあった。

それぞれの心に  
それぞれの思いをもっているけど、  
最後に一つ決めたことがある。

このスタディーツアーを

“きっかけ”

にして  
これからもずっと  
バングラデシュのことを  
考え続けていこう。

あそこで出会った  
少年、少女のために。  
私たちの仲間のために。

隣人として。

## 第26回 ACEF STUDY TOUR 報告書

### ～目次～

- ・ バングラデシュ概要
- ・ ACEFとBDP
- ・ メンバー紹介 (ツアーメンバー&BDPスタッフ)
- ・ 日程&コメント (◎日誌などより感想 \*詳細&ミニコメント)
- ・ 名言集&迷言集
- ・ 印象に残ったこと～いろんな意味で～ (感動したこと、ハプニングなど)
- ・ バングラデシュの子供たちと遊ぼう！！
- ・ バングラデシュの衣・食
- ・ 船戸先生コーナー
- ・ みんなの感想文
- ・ 名簿



## バングラデシュ概要

国名：バングラデシュ人民共和国 (People's Republic of Bangladesh)

バングラデシュ=ベンガル語を話す人たちの国

面積：14万4千km<sup>2</sup> (北海道の約1.7倍)

国土：世界最大のデルタ地帯 (ガンジス川とブラマプトラ川が合流し、大河となってベンガル湾に注ぐ) 雨季には国土の3分の1が水没する

人口：約1億3千万人 (日本と同じ位)、大部分がベンガル人

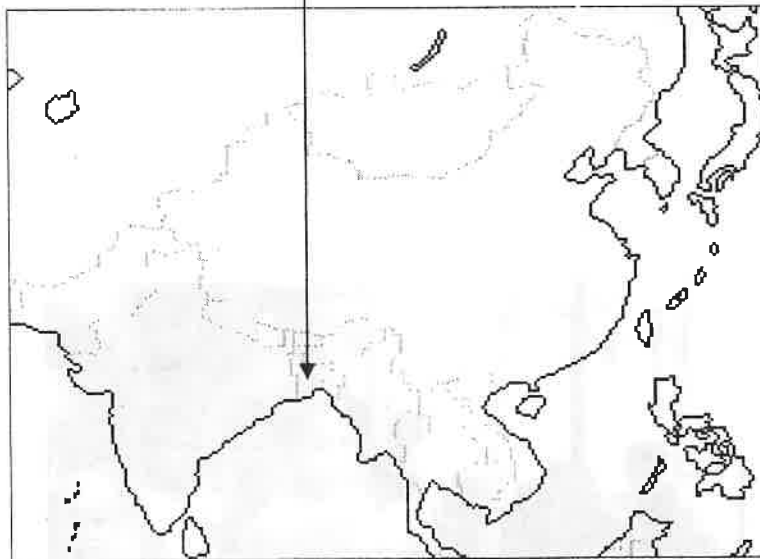
言語：ベンガル語、成人識字率：48.7%

宗教：イスラム教徒 88.1%、キリスト教徒は0.3%

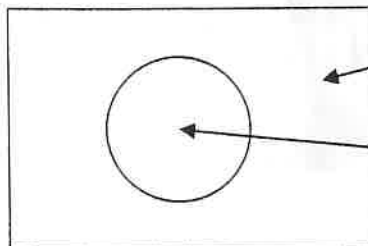
略史：1947年 8月14日 パキスタンの一部 (東パキスタン) として独立

1971年 12月16日 バングラデシュとして独立

バングラデシュ



バングラデシュ国旗



緑地：緑の大地、イスラム教への信仰、農業の発展

赤丸：独立のために流された血、情熱、太陽の恵み

※外務省ホームページ<各国地域情勢>など参照

## BDP&ACEF

☞ ACEFがBDPを援助しているのではなく、  
ACEFとBDPは“CO-WORKERS”です！

### **BDP**

1990年5月、女医として地域医療に従事していたDr. ミナ・マラカール氏は、保健、衛生教育その他すべての地域活動の根底に「基礎初等教育」がなければならないことを痛感し、「すべての子どもに読み書きを」を念頭に、ダッカ南部ジュライン（スラム地区）にて寺子屋運動を開始、「サンフラワー教育計画＝SEP」と名づけました。それが、1999年6月に政府からNGOとしても正式な認可を受け、それに伴い名称を、「Basic Development Partners＝BDP」と変更しました。スラム地区から164名の寺子屋幼稚園生で始まった活動が、みるみる拡大し、現在では6地区において生徒64校、約11,020名の生徒が学んでいます。

B (Basic) 教育をはじめ開発・発展の基礎となるものを求めること

D (Development) 初等教育を中心としつつ、

その周辺にある課題にも配慮を加えた発展を考えてゆきたいとの願い

P (Partners) ACEFとの関係は、援助する側される側の関係ではなく、ともに Partner, Co-Worker (共働者) としての共通の目標に向かって働いているのであり、その関係はBDPと住民とのパートナーシップ (共に働く) ともなっています

### BDPの活動

- 1) 寺子屋幼稚園
- 2) 寺子屋小学校
- 3) 職業訓練学校 (機械科、電気科、木工科、溶接科、裁縫科、コンピューター科)

### **ACEF**

アジアキリスト教教育基金 (ACEF＝エイセフ) は、マラカール女史よりの呼びかけに応じて、バングラデシュの子どもたちに「寺子屋を贈ろう」と1990年10月に日本で発足したNGOです。

### ACEFの目的

- 1) バングラデシュに寺子屋を贈ること
- 2) アジアの諸問題に、積極的に取り組む青年を育成すること

### ACEFの活動

- 1) 3月と8月のバングラデシュスタディーツアー
- 2) 春と秋のセミナー
- 3) 書き損じはがき・テレフォンカード回収
- 4) バザー など

※ACEFホームページ参照

と彼を万々な人生を送ってきた先生は、糸馬乗の豊かさがその人間性にとってもよく表わっていました。いろいろなお話をたくさんして下さいました！先生が聞いたら女嫌がりぞうだ！けど、やっぱり先生はかawaii♡♡



もちよって火災けれど、ベンガル人と比べると体格のよい先生です。おいしい料理を食べまくってたのてしたとか。常に孝女者としての視点を保持していらっしやう。冷静に考えを話して下さいました。



オシムさんととてモ仲が良い♡オシムさんポシヨントコリかがオシムさん♡ちよってた発言がとてモ面白く、ツボでした。常に冷静に私たちを見守ってくれ、お母さんのようでした。12年前のフーバイルやダリカの様子なども話して下さいました。



広島在住のACEFのボランティアをなさっています。方々の中のいろいろな土場面でオシム達の矢向ない話をたくさんして下さいました。母親として感じることも考えさせられることなども話して下さいました。ダルスープが大好き！



シュゾン君は、ホクワガンジの食事のお世話をしてくれました。12歳なのに、車目から伊豆まで働かいていて、ひたすら豆貝が下がる思いです。いつも夜更までかawaii!! 最後にかなびよんがあげたシャボン玉をうれしそうにぶいていたのが印象的。

舟谷戸先生

びん先生

かがこさん

たかこさん

シュゾン君

# ホクワガンジチーム!!

常にチャレンジャー!! 木に登り、泳ぎ、カ車をこぎ、床屋で髪もセカた!! 中物事を冷静に判断する男々(他のメンバーより一足先にACEF会員だったので先生から聞いた話をたどるような旅で、皆とは違った視点を保持していました。



あいのり

日本の哥丸からベンガルの哥丸まで哥丸になったのめいり存在。「ハンガリーマジとマンダリーになる!!」



ハモントさん

現地の床屋さんで髪を切ってもらっていた。さっほり。アムンさんととてモ仲良くお話をしました。ベンガラSTからリ帰した後、すぐニフィレンSTに行くというマツな男である。



たなちさん

ネトロコナのBDPスタッフ。ハズグさんの糸召介と2004年2月にBDPIに入ったばかりです。日本のことを熱心に聞いてくれました。



アムンさん

シヤイなドライバー。いつも私達たちの健康を気遣ってくれました。食事のメニューも考えたリ作ったり、決めめた才能をもつモジヤな(面白い)人。



イリヤスさん

# ネトロコナ男性陣

すけさけokeを言う。  
ギャグ大好き！  
小言多々女子き！  
バンガルの言語が上手。  
サロワカがとっても  
似合う。いつも笑顔  
のステキな方です。  
バンガラダンスが  
本当に好きなんだ  
など感じたよ☆

なんでも  
セセラセラ♪♪  
(なるようになるまで  
いう意味)  
何にも重くない。  
ゴキブリにさえも  
重くない女。ゴキブリ  
のつかやうちが得意。  
日明るく元気がとてえ！

フランス言語バラバラ。  
本人いあく、「自分は  
おっとりしているよだ」  
そうだが、石壁かに  
ちよとおっとりして  
るかも。でも、人の  
気持ちもちを理解して  
くれる。いい人です！  
あめとり名人その1。

癒カ坊物大女子き！  
糸金を描くのも大好き！  
子供たちの似顔絵糸金  
を描いたりもしてま  
した。そして、いろんな  
ことをよく考えている子  
でした。体言回りの優  
れないあっこをいも  
気がかってた。優しい子。  
あめとり名人その2。

Xメンバー唯一  
の高橋交生!!  
「たなはバンガルの言語  
で「おひいせし」という  
意味。「ナナドリ(なげ)  
ナイ」とずっと言ってい  
ました。高橋交生なのこ  
しかりしていて、いろんな  
人のことを考えられる  
女の子でした。



のりこせん

あっこ

その

ようこ

# ネットロコナ女性陣

ボクシガンジでサシ  
ーレさんに一目惚れ  
したが、翌日大失恋。  
詳しいは、パニング集  
にて。糸金系ないの  
持ち主で、言葉をよく  
選んで発言していま  
した。  
(本人談：恋ではあり  
ません。ただの  
ファン  
です！)

旅を通して一番泣い  
てなかなひん。ニュー  
マーケットの出来事  
を通して、現実の厳し  
さや辛さを受け入れ  
る強さを持ちたいと  
言。てたのが印象的。  
BDPスタッフと一糸金  
になって取次で帰るま  
でいて、とにかくノリ  
がよかった!!

バンガラの道にぼん  
どを走るワゴン車の中  
で寝続けた人。この人  
はどこと寝ると  
思いました。笑顔が  
素敵すぎる！まこと  
ステキな先生になるほ  
すの感謝するのを大  
七かに、正しいものを  
選択してほしい!!と  
シエリングで言っていた  
のに共感

ファルークさん公認  
第二夫人。ファルーク  
さんも本当に喜んで  
いた木美子。いつも明る  
く。BDPスタッフの人  
に糸金極白白に言  
かけ、パニング  
がクタクタ催促されま  
した。みほとは小学校  
からの友達。

みせは  
「ちよとー」  
「しけい」。「走  
うけるー」みんなの  
リーダー。白白の  
でした。シエリングで  
スバリとしたコメント。車  
庫のお話でメンバーの  
いをお話しました。オム  
さん→ファルークさん→アリ  
さん→アルベルトさんと  
ちよとー  
恋多  
く女  
でした



あめの

かな  
vish

まこと

なつみ

みほ

# ボクシガンジ女性陣

歌っていたら止まらない。って毎日行くハハハなサイフルさん。実はパンダのテレビに1回出演したことがあるらしい。いつもは歌って踊って大ハハスルなのに、ダンスのスタンプが来ると急に音声がなくなってしまいます。



サイフルさん

「カエレの歌」がとっても大好き♡「サイフル」さんの言い方にこだ"あり"があるらしい。「フル」の音分をちよつと色っぽく言うといいらしい…。新婚さんです!! 月曜シが似合います。



ラハジさん

2003年8月にBDPのスタッフになったばかりのコンコさん。STもネカ参加です! コンピュータが専攻です。日暮るいキャラクター。いつも私たちを笑わせて元気がたててくれました。No long distance in our friendship!



コンコさん

BDPの言う最強ドライバー。たまってるとワールなのに。実は超おちめな人です。最後の日の華麗なダンスが忘れられません。「ハシダオ」と言う。おおげさに「ハハッ」と笑ってくれました。



オシムさん

BDP ★ Staff!!

ボクシガンジのBDP organizerのマシュートさん。リア中に高熱を出してしまいました。びね先生があげたバファリンが効いたようでホッと安心。お子さんがかわいい!!と言ったら本当に嬉しそうに笑ってました!



マシュートさん

ボクシガンジのBDPスタッフで、マシュートさんの音B下にあたります。系女好きでこの仕事を始めたらしいです。泉さんはBDP schoolの先生! どんな日も笑顔を系色せさない方でした。



サミュエルさん

ボクシガンジで「お世話になった方」です。口癖は少ないですが、とても優しい人です。なんと20歳! 私たちと歳があまり変わらないのに、トレイモン"さん"の方が全然木っ"ぽい"です。



トレイモン"さん"

ネトロコ+のスタッフ。流し目がかっこいい、糸巾のTシャツを着た、笑顔を素直な人です。こ"は"んの食べ方を何度も教えて下さいました。



ハビダさん

ネトロコ+で食事を出してくる、いつも笑顔を素直な人です。シェアリングの日に糸色少女なタイミングでお茶をきってきてくれました。



ラジキ"さん"

BDP ネットロコ+ & Staff! ボクシガンジ



## ツアー日程

3/12 (金)	成田空港発ーバンコク経由ーダッカ空港到着 プーバイルのBDP オフィスへ
13 (土)	開会礼拝 アルバートさんのお話 移動 →A チーム：ボクシガンジへ B チーム：ネトロコナへ
14 (日)	A・B チームともBDPの寺子屋訪問
15 (月)	A・B チームともBDPの寺子屋訪問
16 (火)	プーバイルに戻る バングラデシュの歌を歌っていただく
17 (水)	ダッカのNew Market で買い物 フリータイム (BDP スタッフと話したり、夕日を見に行ったり)
18 (木)	Wrap Up Discussion 閉会礼拝 記念撮影 ダッカ空港発ーバンコク経由
19 (金)	成田空港到着、家路へ・・・



# 12日(金)

9:00 成田空港 "G" カウンター前集合

- \* 船戸先生現れず?! (のりこさんは一週間先にバン格拉デシュへ)  
→船戸先生は 8:00 から "E" カウンター前で待たれていたそう…。

11:20 “定刻通り” 出発

- \* Biman Bangladesh 航空が定刻通り出発するのは稀!! ラッキー!

18:30 ダッカ空港着

- \* のりこさんがサロワ・カミューズ姿で現地になじんでいた★

19:30 プーバイルへ向けて車に乗る

- \* あまりの人の多さにびっくり!
- \* 乾季じゃなかったの?! 蒸し暑いっ!!
- \* 蚊が…。
- \* いきなりタイヤがパンク (バン格拉デシュでは日常茶飯事らしい!)
- \* 停車中、車の周りに人が沢山集まってきて、戸惑った。
- \* クラクション鳴りっぱなし!

◎ ダッカ空港へ着くと、蒸し暑い空気が辺りをおおっており、バン格拉デシュへ来たのかと理解はしたものの、実感がわかなかった。・・・不思議な感じがした。夢の世界に来ているようだった。(たなちゃん)

20:30 プーバイルの BDP オフィス到着

21:00 チャー、ビスケット、バナナをいただきながら、自己紹介

- \* 本場のチャーはおいしい!! (さっちゃん)

21:30 プチ歌合戦

- \* サイフルさん、歌いだしたら止まらないっ! しかも、愛の歌、中心♪

22:00 水浴び!!

- \* 井戸で水を汲むのが初体験だった! しかも裸で…。(あやの)
- \* 初めは、冷たかったけど、慣れると楽しい♪ (かなびょん)

# 13日(土)

6:30 ラジオ体操

- \* 船戸先生、ラジオ体操うますぎです!!特に肩上げの体操♪♪

7:00 開会礼拝：のりこさんのお話

- \* 一日は、8万6千4百秒の口座、使い残しはできない→どう使うか  
「今」=神様からの PRESENT、時間は待ってられない

7:30 朝食

- \* 初ルティー!! (小麦粉で作られた薄いパンみたいなもの) モジャ★
- ◎ 右手のみでルティーをちぎってカレーを包んで食べた。やはりすごく難しく、手がつりそうになるし、ひじを張りすぎて隣の人にはすごく迷惑だったと思う。  
(あっこ)

9:15 Albert さんのお話

①BDPの方針

- \* 問題を教育によって解決しようと努力すること
- \* 女性を先生にして、女性の地位向上・エンパワーメントを図ること

②バングラデシュで私たちに心がけてほしいこと

- \* バングラデシュの人々を理解しようとする、それが、自分を知ることにつながるっていく
- \* 社会学者のように批判的に分析するのではなく、そのまま感じ、理解し、主体的に自らを投入すること
- \* 色々な違いがあるけれどもそれを Friendship によって乗り越えること

◎ Nothing is better than to love and to be loved. と Please be an ambassador of BDP. とメッセージとして言われたのが印象的だった。(かなびょん)

10:00 A チーム：ボクシガンジ、B チーム：ネトロコナへ向けて出発

- \* ボクシガンジはインドとの国境近くで、象が出ることもあり、運がよければ会えたりもするらしい。でも今回は象が出そうな奥のほうまでは行きませんでした。

### Aチーム

13:00 マイメイシンで念願の“サロワ・カミューズ”を購入★

\*車の中でも外でも注目的。  
困った…。

15:00 ボクシガンジに到着

\*泊まるゲストハウスの豪華さに  
唖然となってしまった…。

16:00 遅めの昼食、早めの夕食

\*右手で食べるベンガルスタイルに  
初挑戦!!おもしろいっ!

17:00 出し物練習

19:00 晩禱：船戸先生

\*不正義との戦い

19:30 シェアリング

\*ファルークさん、コンコさんと

21:00 出し物練習

### Bチーム

14:00 ネットロコナに到着

\*早速子供たちが集まってくる  
みんな自分の名前を書きたがる!

15:30 Tea Time 自己紹介

16:00 買い物に出発

\*子供たちが一生の別れのように  
手を振ってくれた…笑。

\*サロワ・カミューズ購入★

18:30 ファルークさんの実家訪問

\*テレビと家の広さにびっくり!

20:00 夕食

21:00 晩禱：のりこさん

\*幸せとは。マザーテレサの言葉



# 14日(日)

## A チーム

### 8:30 BDP school 訪問① (Dumurtala School)

- \*ゲストハウスから一番近いBDP school
- \*1~3年生：2クラス、4,5年生：1クラス  
(高学年が少ないのは、ドロップアウトしてしまうため)
- \*生徒数 240人、先生 6人



### 10:00 BDP school 訪問② (Dighkuna School)



#### \*BDP school の初期の形

BDPの方針として、地元の人の学校を作ってほしいというニーズがあったときに、まずは、「幼稚科」から始める。建物はすぐには建てず、周りから授業の様子が見えるように屋根だけを用意する。1,2年続け、地元の人たちに学校の意義を徐々に理解してもらうようにする。理解を得た上ではじめてレンガ造りの学校を建て始める。インフラストラクチャー「だけ」を整備することはしない。

### 12:00 教会訪問

- \*マンディー語を話すガロ族の教会  
(カトリック)、打楽器を使って讃美歌を歌う
- \*ガロ族はモンゴル系の顔で、日本人に似ている。
- \*寮と学校が併設 (男 25人、女 19人、先生 3人)
- \*1~5年生、ここを卒業した生徒は公立中学校に進学することもできる。



- \*カトリックのミッシヨナリーで来た、基礎的な医療知識も持ち、先生でも医者でもある女性に、子供たちがドロップアウトしてしまうこともあるのかを質問したところ、「私たちは、子供たちの親が彼らを愛するように、彼らを愛しているから、ドロップアウトはいない」と話してくれたのが印象的だった。

## 14:45 BDP school 訪問③ (Chairipara School)

\*生徒 210 人、先生 3 人

\*ボクシガンジのBDPスタッフ：マシュートさんの奥様が先生をしていて、2人の子供たちも通っている。



\*子供が増えたため、  
近くに新しい学校を  
建設中

## 17:30 船戸先生ヘアーカット

\* 出張床屋さんが来た！

## 18:00 BDP スタッフとおしゃべり

\* 停電したけど楽しくて気にならなかった♪

## 20:00 夕食

## 21:00 晩禱：輪島先生

\* 地の塩、世の光

## 21:30 シェアリング

みほ：子供たちの目の輝きが違う

かな：時々学校に行くのが面倒くさいとか感じてしまうことがあるが子供たちの姿を見て勉強に対する姿勢を考え直した。

なつみ：「発展」ってなんだろう？途上国は何を境にして先進国になるのだろうか？「発展」について考えたい。

輪島先生：日本を紹介する紙芝居で、コンピューターの授業風景を紹介しようとしていた。日本にいる時は何も感じなかったがよくよく考えたら無神経だったとこちらに来て気づいた。

和子さん：12年のBDPの道のりを感じる。



## B チーム

7:00 朝祷：その

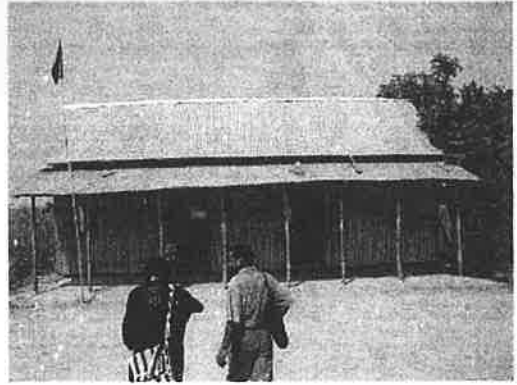
7:30 朝食 \*パパイヤカレーが出た！

8:30 BDP school 訪問① (ベタティ・ジェレパラ)

- \* リキシャに乗って移動
- \* 貧しい漁村の学校

10:30 BDP school 訪問② (パットリ)

- \* 舟に乗って移動
- \* ネットロコナで「初めて」できた学校
- \* 一人、まるごと一個のココナッツをごちそうになる。  
中にはココナッツジュース&ナタデココが！



14:00 子供たちと遊んだり (あやとり)、BDPスタッフと話したり

- ◎ 私は朝、周りの人に関心を向けたいということを主張していたくせに、ヘモントさんとかに、何も聞いたりしてなくて、でもヘモントさんは私に色々聞いてくれて、私に関心を向けてくれたので、明日はこっちからもいろいろバングラデシュのことを聞いてもっと知りたいと思った。マムンさんは日本語を一生懸命聞いてきてくれて私は自分の国のこともあまり知らないんだなってことが恥ずかしくもあり、一生懸命日本のことを聞いてくれるのが嬉しくもあった。(その)

\* 洋子は子供たちの似顔絵を描いてあげる。

- ◎ ネットロコナでの2日目、教会に行くはずだったのだけれど、デモの関係で橋が封鎖され、行かれなくなったため、宿舎裏の井戸の辺りで、寝ている犬の絵を描いていた。子供たちが早速集まってきて興味を持ってくれたので、そこにいた一人

の女の子の似顔絵を描いてあげた。2~3人の絵を描くと子供たちは自分の絵も描いてほしいと私を取り囲むように群がってきてしまった。言葉も通じないし秩序もない。皆、それぞれ自分を指差しながら我先にと私につめよってきた。事前に教えていただいていた、「物をあげるのはあまり良くないかもしれない」という言葉が頭に浮かんで「ああしまったなあ」と思った。小さなけんかがはじまってしまい、その中で少し大きめの女の子が自分より小さい女の子の似顔絵を奪い取って自分を指差し、「描いて描いて」と強くねだってきた。他の子のも持っているのに…と思ったけれど、とても熱心にせがむので描いてあげると持っていた似顔絵を小さい子に返した。「ああ、そういうこと（取り引き?!）だったんだ」とわかり、絵を描き始めてしまった自分に後悔した。できるだけ多くの、できればそこにいる全員の顔を描いてあげたかった。けれど、そんなことは到底無理で、時間もなくなり後引く思いでもやもやした気持ちのまま、その場を去った。夜のシェアリングでその出来事を話した。するとのりこさんが、「洋子が絵を描いてあげたことはただ“ものをあげた”というのとは違う。一人一人の目を見て描いたことは『こういう人が来て、自分の絵を描いてくれた』と子供たちの心に残ることだから」と言ってくれた。とても嬉しくて、絵を描いたことは悪いことじゃなかったのかなと思えた。そして、あの暑いバングラデシュの井戸端で、えを描いてあげたときに見た、一人一人の美しい瞳や、かわいいピアス、真剣な顔、恥ずかしがる男の子、嬉しそうに笑う女の子の笑顔が、私の心にも強く残っていることに気づいた。そして、教育とは、ただ勉強をするためにあるのではないことと、教育の大切さを実感した。(洋子)

\* 田中画伯は、建物の絵を描く。すごくうまい!!

\* あいのり、あいがも(?)と共に、泳ぐ!!

◎ アヒルと追いかっこをしたけど、負けました……。

修行が足りない!! (あいのり)

17:00 ネットロコナといえぱっ!!の“夕日”  
を見に行く

\*夕日が河に映って、すごくきれい!!



- \* 14歳のシャミン：すごく上手で自分の歌声に酔いしれているように歌う。(左中央)
- \* 日本語をまねするのがうまいノヨン：「おれ、かっこいい」とか言えちゃう。(右)



◎ 夕日より、一緒についてきてくれた子供たちの方が印象的。子供って別に好きじゃなかったのに一緒にいた子供たちを純粹にかわいいと思えた。(洋子)

- \* あいのり、あっこ、ハリーは子供の家を訪問し大歓迎をうける。
- \* イリヤスさんが、蛍を袋に詰めて見せてくれた。

20:00 晩禱：あいのり

20:30 シェアリング (ヘモントさんを交え、ろうそくの光の中で)

- \* あいのりの晩禱で、ちょうど、「施し」についての聖書の箇所があたり、「物をあげる」ということについて話した。ただ物をあげることは本当の施しにはならないという意見がでた。
- \* 日本では物が溢れすぎていて自分自身のことについて考えにくいけど、バングラデシュのシンプルな生活では自分自身を見直せる。
- \* 日本では学級崩壊などが問題になっているが、バングラデシュでは、生徒全員がクラスのみんを見られるように輪になって座っていて、先生や発表者の話している方をしっかり見ている、全員参加型の授業だと思う。

# 15日(月)

## A チーム

7:30 朝祷：さっちゃん

8:30 BDP school 訪問④ (Balujuri School)

\*ACEF 会員藤村さんの長年の寄付によって  
建てられた学校

\*生徒数 235 人、幼稚科、1~2 年生：2 クラス  
3~5 年生：1 クラス、先生 5 人



11:30 BDP school 訪問⑤ (Konekanda School)



\*生徒 250 人、幼稚科：2 クラス、1~5 年生：1 クラス  
\*ココナッツジュースと、5 年生のクラスからマラ（首飾り）をいただいた。

\*250 人もの生徒がいるにも関わらず、整った校舎がなく、子供たちは、大きな木の下や農家の庭先で勉強していた。ぜひ校舎がほしいと地元の人々が熱望。

◎ 「屋根がないので日差しが強い日や雨の日は大変なのだ」と近所の住民の人が訴えるように私たちに説明してくれたのが印象的でした。（あやの）

13:30 庭のブランコで裏シェアリング

\* 今回のことをどうつなげていけば良いのかとか、バングラデシュに来て感じ考えたことを熱く熱く語り合った。

\* 特に、ST に来たのに、豪華なゲストハウスに泊まっていることに対する状況について語った。

◎ 友達が去年の夏に南アフリカに旅行に行った。そこでは、日本人やお金持ちが住む地域と現地の人たちが住む地域の間には有刺鉄線がはりめぐらされていた。その話を聞いて自分は、そんなところには泊まりたくないと思ったが、それと同じ様な柵に囲まれたゲストハウスに今、自分がいるという苦しい事実がある。日本人は「富の上にあぐらをかいている」という船戸先生の言葉を実感した。（なつみ）

## 15:00 BDP school 訪問 ⑥(Bainnabpara School)

\*池のほとりにある学校

\*幼稚科：1クラス、1,2年生：2クラス

生徒80人、先生1人

\*分校のような感じで3年生からは①で訪ねた学校に通う



- ◎ 色々な動物が学校の横を通り過ぎていくのが印象的だった。特に男の子が、子供ガチョウに近づいたとき、親ガチョウがそれを必死で阻止しようと向かっていった強い姿が忘れられない。

## 16:00 お茶休憩→驚愕の事実発覚！！

- ◎ 予定していた全ての学校を訪問し終えた帰りに BDP スタッフとお店に寄ってお茶休憩。まわりの友達に勧められ、ボクシガンジの BDP スタッフ、サミュール君とツーショットを撮ることに！！（サミュール君ファンでした。）やったね★と思っていると、帰り際に赤ちゃんを抱っこしてきたサミュール君が、なんと “This is My Daughter.” と一言。他のメンバーが、「ファルークさんがすてき」、「シュドン君かわいい」と言っている中、一人で頑張っていたのに…。でも私だけじゃなくて他のみんなも驚いていたし！！その夜のファルークさんとのシェアリングではいつも知的なファルークさんが枕を抱えて爆笑。そんなに笑わなくてもいいのに…。(あやの)



## 16:30 夕日を見に行く

- \* 途中で、コンコさんがイピリイピリの実で作ったネックレスをみんなにプレゼントしてくれた。コンコさん、ありがとう！！（メンバーはあとの日程、このネックレスをいつもつけていました★）オシムさんもみんなで飲むために RC コーラを買ってくれました、ありがとう！！
- \* 夕日を見る塔の上でコンコさん、コーラを振って大ハッスル！！  
→飛び散ったコーラで孝子さんのカメラ故障…。
- \* オシムさんは実は、高所恐怖症だったみたい。

- ◎ 赤く沈んでいく太陽を見て、この太陽は日本で見ているのと同じだ、地球って小さいんだな、同じ太陽の下に皆いるんだなと実感した。(なつみ)
- ◎ 緑の山々に赤い太陽が沈んでいく様子がバングラデシュの国旗みたいだった。(かなぴょん)

19:30 夕食

20:30 晩禱：綾乃

21:00 シェアリング

- \* ボクシガンジでの寺子屋訪問で得たこと、考えたこと、またゲストハウスに泊まれたからこそ感じることできたこと、日に日に強まる心苦しさを、みんな涙ながらに語った。

22:30 船戸先生の人生講座、恋愛講座（笑）

23:40 Faruk さんとのシェアリング

- ◎ 夜遅くまで続いた私たちのシェアリングが終わるのを待って、ファルークさんは、私たち 5 人を部屋に招いてくれた。バングラデシュについて熱く語り、ふざけあい・・・ファルークさんの名言をいっぱい聞かせてもらい、その一つ一つが心に重く残ります。「文化の違いはあるけれど、言葉の違いは not important で心があればわかりあえる、本当に重要なのは心なんだ、そしてバングラデシュには温かい心が沢山ある。」とおっしゃった。すごく心を打たれた。そして、たどたどしい私たちの英語を真剣に聞いてくれました。この時間でファルークさんとすごく分かり合えた気がした。バングラデシュを愛し、バングラデシュの人々を愛し、BDP で働くことにすごく誇りを持って信念を持っているファルークさんがすごく輝いて見えた。かっこいい♥♥ また、あやのの失恋(!?) 話に爆笑のファルークさん。奥さんとは結婚するまで会ったことがなかったことなどを話してくれた。ファルークさんの第 2 夫人になりたいって告白しました♥ 鳥が好きなおちゃめな一面も発見しました。3 時近くまで私たちとの話に付き合ってくれたファルークさんの優しさに感謝です！（なつみ）

## B チーム

7:30 朝禱：のりこさん

9:30 BDP school 訪問 ③ (シムラティ)

- \* メンバーの後ろに行列ができる。
- \* 村人が大勢集まってきた。村人が日本人にとっても関心がある。



11:00 BDP school 訪問 ④ (ショアリカンダ)

- \* BDP オフィスのすぐ近くなので、知っている顔がちらほらと！
- \* 授業にお邪魔してから、男の子と女の子に別れて遊んだ。  
男の子：片足ケンケンなど、女の子：なべなべ底抜けなど



◎教室の中で「将来の夢」を聞いたら先生になりたいという子が多かったことに対して、ヘモントさんは、バングラでシュのほとんどは「農民」で農民の中に教育を受けてきた人が必要だから、学校の子供達が教師とか会社員とかになりたがるのはボロボロ問題と後でおっしゃっていた。(ボロ=大)

14:00 BDP school 訪問 ⑤ (アショダキ)

- \* 幼稚園のみ1クラス、1年生になるとショアリカンダスクールに通う
- \* ヘモントさん、名言を残す。→名言集参照。
- \* 「ナナさん、ダリ (ひげ) ナイ」大ブーム

◎ 「私の名前、ナナはベンガル語で、「おじいさん」という意味で、たくさんの人に覚えてもらえて今日ほど、自分の名前に感謝していることはないと思います。今度来るときは、ひげをつけてネトロコナを訪問したいです。(ハリー)

\* 「贈る言葉」を大合唱

- ◎ 行った先で歌った「贈る言葉」になぜか感動して泣きそうになったことは秘密です。(あいのり)
- ◎ 女の子たち三人が「エイポッダー♪」を歌ってくれて歌い終わったら三人とも恥ずかしそうに村人たちが集まる陰に走っていったのがかわいかった！（その）

\* BDPで「初めて」購入した土地を見せてもらう

- ◎ BDPは今まで土地を買うのではなく、地域住民から、寄付をしてもらった土地に学校を建てていたので、土地を買うということは、画期的なこと！！

\* リキシャこぎに挑戦！！

- ◎ 最初の日からリキシャをこぎたい！！と主張していた僕ですが、それがついに叶い、乗らせてもらえることになりました。庭を一周。それが難しい。しかし、あっこは隠れた才能を発揮し、難なく乗りこなし、リキシャのプロごとく、立ちこぎで洋子を乗せてこいでいた。僕といえば、2回目の挑戦でヘモントさんを乗せました。最後に「2タカ！」って叫んだら、本当に2タカ紙幣をもらってしまった。記念になりました！（あいのり）

\* ネットロコナの星はきれいで大きい！！

- ◎ ほんとに星が近くて大きくてプラネタリウムよりすごかった！この日イリヤスさんが「星」は「タラ」っていうって教えてくれました！ちなみに蛍は「ジョナキポカ」（その）

20:30 晩禱：たなちゃん

21:00 大宴会（日本の歌とベンガルの歌を交互に歌った。）

- \* ヘモントさん、歌うまい！最高！！
- \* シャイなイリヤスさんが踊って「All Night Gan！！（ベンガル語で歌）」とはしゃいでいた！！
- \* ハビブさん：ダンス激しくてすごいノリノリ♪パワフルですてき！！
- \* マムンさんはたなちゃんに捧げる歌？！を熱唱！！マムンさんとたなちゃんは、肩を組んで、仲よし！
- \* 最後に「小さな世界」を歌って、歌詞がすごい身にしみた！本当に世界中誰だって微笑めば仲よしさ！！！！

# 16日(火)

7:00 朝禱：A・みほ、B・あっこ

8:00 Aチームプーバイルに向けて出発 9:00 Bチーム出発

- ◎ 朝ごはんのとき、現地スタッフ代表として、ハビブさんとヘモントさんからお話をいただいた。その中で、ハビブさんの「トイレも食事も寝る所も、色々不便だったでしょうが」という言葉があった。私は改めてこの最後の日にスタッフが心から、私たちがどうすればより良く過ごすことができるか考えていてくれたか、ということを感じた。STでバングラデシュに来ているのだから、私たちが相手に合わせるということは当たり前で・・・と考えていた私たちにとっては思いがけない言葉だった。そんな優しいスタッフともお別れ・・・。たったの3日間だったのに、以前からとても親しい人たちとの別れのように感じた。(洋子)

13:30 Bチーム、プーバイルに到着

14:00 Aチーム、プーバイルに到着

- ◎ 3日しか離れていないのに、すごく長い間分かれていた気がした。それだけ、両チームとも農村で密な時間を過ごせたということだろう。(かなびょん)

15:00 たなちゃん、あいのり、ヘアーカット



\*「日本男児なら・・・!!!」  
という船戸先生の強い勧め(強制?)  
があった。

←Before

After→



\*近所の子と遊んだりスタッフと話したり。

- ◎ Aチームは、ボクシガンジでは近所の子供たちと触れ合う機会がなかったので、子供たちと遊ぶことを楽しみにしていた。そこで、風船とシャボン玉で遊ぼうということになった。初めのうちは、シャボン玉にはしゃいでいる子供たちだったが、風船を配りだすと「自分にも」「自分にも」と次々に手が出てきた。中には、「This is My Son!」と自分の息子に風船をと必死なお母さんもいた。ちょっとびっくりした。もう、混乱状態になってしまったので、「もうない」といって宿舎に戻ったが、その後、どうしたらうまく遊べたのか、物を使わないで遊ぶということなどについて話し合った。(かなびょん)

17:00 夕日を見にお散歩

19:00 ハルモニウム、たいこに合わせて、バングラデシュの歌を満喫♪  
洋子の絵



20:00 夕食

20:45 晩禱：かなこ

シェアリング

\* このシェアリングでは、①A チーム、②B チームの順で、それぞれ感じたことを話し、質問しあったりした。

A チーム

- ・ 学ぼうとする姿勢の違いを感じた
- ・ 子供自体は、日本もバングラデシュもともに純粹である
- ・ 日本の教育のダメさ、大人がいけない
- ・ BDP スタッフからすごく愛国心の強さを感じた
- ・ 感謝することの大事さをすごく感じた。
- ・ 教育は与えられるものではなく、作り出すもの。住民の許可を得るまでは学校は建てないという BDP の方針であり、みなで作り出す大切さを学んだ。
- ・ 自分の人生の中で、一番考え、学んだ。
- ・ 言葉も大事だけど、一番は心。同じ気持ちを共有することが大切。
- ・ 勉強できることに感謝している素晴らしさ。
- ・ ボクシガンジでは有刺鉄線に囲まれたゲストハウスで贅沢した心苦しさ。
- ・ 日本人は、世界を知らない。良い意味での発展を望む。
- ・ 日本で何も知らずに生きていけるけど、色々なことに気づけた自分が幸せ
- ・ バングラデシュではこれからどこを保存しどこを変えていったらいいかすごく考える。
- ・ バングラデシュの中での文化の多様性はこれからどうなっていくのか
- ・ BDP スタッフの優しさに甘えてしまっているから、感謝しなくてははいけない

## B チーム

- ・ バングラデシュに来て、本当に心の底から笑えた。豊かさとは何だろう？発展とは何？ということについて、すごく考える。発展の過程で、自然と人の心が変わらなければ良いと本当に思う。
- ・ ただ物をあげるだけでは偽善者に過ぎず、助けてあげることが援助ではないか
- ・ 自分が描いた絵をほしがる人に、NO といっても「それでも、友達でいてくれるかい？」といわれた。NO ということが苦手だったが、はっきり言うことも大事で、それでも認め合うのが友人だと感じた。
- ・ BDP スタッフの温かさ。物質的な面では貧しいけど、心の豊かさを感じ安心した。
- ・ ヘモントさんが学校へ行くことはすごく大事だと村のみんなに説明しているのがとても印象的だった。

◎ Aチームはボクシガンジだけでは、Bチームはネトロコナだけではわからなかった思いや体験を分かち合うことができたことから、2つのチームに分かれてスタディーしてきた意義をととても強く感じました。(洋子)



# 17日(水)

7:00 朝祷：なつみ

\* 船戸先生の運命の詩「星を動かす少女」

「星を動かす少女」

クリスマスのページェントで、日曜学校の上級生たちは三人の博士や、牧羊者の群れや、マリアなど、それぞれ人目につく役を振りあてられたが一人の少女は、誰も見ていない舞台の背後に隠れて星を動かす役があたった。

「お母さん、私、今夜、星を動かすの。見ていてちょうだいね」

その夜、会堂に満ちた会衆は、ベツレヘムの星を動かしたものが誰であるか気づかなかった。

けれど、彼女の母だけは知っていた。

そこに少女の喜びがあった。

9:30 近所の子供たちと遊ぶ（だるまさんがころんだ、かごめかごめなど）

11:00 ダッカのニューマーケットへ

- ◎ ニューマーケットへ行くバスも、結局、A、Bできれいに分かれてしまいました。農村での生活の濃さをまたまた実感！
- ◎ お店が沢山ありすぎて目移りしちゃいました。日本から、1万円分のお金を持ってきていたので、沢山買い物をした。でも、そのかわりにとても時間がかかりました。BDPスタッフ、先生を長い間つき合わせてしまって申し訳なかったし、現地のの人にとって一度にこんなにお金を使うことはないだろうし、私がBDPスタッフだったら、きっと「バングラデシュにくることはなかなかないからしょうがない、でも日本の学生は沢山のお金をもっているな」とおもったに違いない。それから、そんなに振り回してしまったのに、イリヤスさんは何一つ文句を言わずに私たちを宿舎に送ってくれた。胸が苦しくなった。(ハリー)

18:30 アルバートさんのお話 →次ページ参照

20:00 最後の夕食

21:00 外での晩祷：洋子

22:00 各々自由にシェアリング

\* アルバートさん、ソントヨイさんとお話したメンバーもいれば、船戸先生とICUについて語ったメンバーも。

## <ダッカにおける貧困、そして物乞いの人々について>

ダッカの街で貧富の差に直面した私たちは、その矛盾にどうしたらよいのかわからなくなり、色々な意見を聞いてみることにした。

- ・ アルバートさんのお話
- ・ 和子さんのお話
- ・ ハリーの質問に対するアルバートさんの答え

### アルバートさんのお話

ニューマーケットに行った後、何人かのメンバーが、体調を崩すとともに泣き出してしまった。暑さだけでなく、いろいろなショックがあったからだ。ニューマーケットで、私たちは、必死で物を売ろうとする身体障害をもった子供たち、物乞いの子供たち、赤ちゃんを抱いたお母さんたち、下半身のない老人・・・日本では出くわすことのない光景を目にした。3日間農村にいたときにはそこまで感じなかった、一国内の「貧富の差」を目の当たりにしたのだった。今の自分にはそれをどうすることもできないことを痛感し、ただただ涙が溢れてくるのだった。Wrap Up Discussion のときに打ち明けてくれたが、アルバートさんは私たちの様子がおかしいのを見て、何が起こったのか、本当に心配になったとっておられた。

しばらく横になっていたら、体調を崩したメンバー皆、回復し、その日感じたことについて話をした。でも、どう消化したらいいのか全くわからず、このことについてバングラデシュ人としてはどう思っているのかアルバートさんに聞いてみようということになった。

そして、アルバートさんに話しかけてみると、アルバートさんも私たちに何か聞きたげな様子であった。アルバートさんは、何でもいいから質問したいことや、感じたことを話してほしいとおっしゃった。そこで、思い切って、ニューマーケットで感じたことなどを話し、アルバートさんはどう感じているのですかと尋ねた。

### <以下、アルバートさん>

私は、そういう光景を毎日見ているけれども、私もなにもできないし、何をしたらいいのかわからない。このことは、長い間、考えていく必要のあることであって、今日だけとか、STの間の一週間だけとか短い間だけ考える問題ではない。あなたたちは、①今日みたこと、バングラデシュでみたことを全て忘れて、日常生活に戻ることに、②常にバングラデシュのことを思い出すことに、この二つの中から、自分がどちらを選ぶか決めることができる。①でもいい。その方が楽だから。②を選んでいくことは大変なことだ。大変な人生なんて誰も望んでいない。けど、それを耐えて、一生考えていくことができる？私は、中

学生くらいのときに、鳥は好きだったけど、よく鳥をエアガンでうって友達と遊んでいた。ある日、教会にいくと、赤・黄・青などのカラフルな鳥が、屋根の上にとまっていた。友達がその鳥に向かって、エアガンを撃つとその鳥は、屋根から落ちずにその場所で倒れて、血だけが壁づたいに流れてきた。それはすごく神秘的で、何かのメッセージのようで、その日から鳥を撃つのはやめた。その帰りに、私は、まわり5 km位誰もいないようなところで一人の女の子に出会った。私は思わずお金を渡したが、友達が、この子にお金を渡しても、今日はよくても明日また、苦しむことになるんだ、といった。そのとき、私は、それなら、いつもこの子のことを思い出して、この子に一生つくしていけるようにしようと決めた。

私たちの周りには、たくさん問題があるけれども、自分の目の前にきた問題を一つ一つ解決していくしか方法はない。学校で起きた問題なら学校で、スーパーマーケットで起こった問題ならスーパーマーケットで、その時々集中して問題を解決することが大事。ひとりで、何千匹も砂浜にうちあげられていて、ある人が、それを一匹づつ海に返していた。すると、ちがう人が、その人に「何をやっているんだ、そんなことしても無駄だ」といった。するとその人は一匹を海に投げて、「他のたくさんのひとでは死んでしまうかもしれないけど、今の一匹は、助かった」といった。それと同じで、一つ解決できることが大事。もし、いっぺんに何個も解決しようとしたら、自分がおかしくなってしまうよ。

それから、神様に今、与えられている状況を感謝して、一生懸命生きること。チャンスは一回しかないから。私は、1999年の4月に父が病気だったので、医者に診てもらうことを勧めたのに父に聞き入れてもらえなかった。そのとき“You are Useless!”などと冷酷なことをいってしまった。5月にもまた勧めたときもつっぱねられたので、またきつい言葉をいってしまった。その後、そのままの状態のまま、2週間バングラデシュを離れなくてはいけないことになったが、父はその間に亡くなってしまった。帰ったときには、死体しか会うことができなかった。結局、私は、父に“I love You.”と伝えられないまま、父と別れてしまった。チャンスは1回しかないから、今は何千回でもLOVEを言いたいのに、いくら伝えたくてももう伝えられない。だから、チャンスを逃さないで、LOVEを伝えたい人には、その人が、自分の目の前にいるときに伝えるしかない。

今、あなたたちに与えられているチャンスは、大学で勉強できること。だから、大学でVery Very Hardに勉強しなさい。それが、今、できることなんだから。神様に与えられたチャンスは、逃さないでいかしなさい。そして、感謝することが大事だよ。

アルバートさんのお話を聞いて、私たちはだいぶ楽になることができた。そして、STで感じたことについて一生考えていくことを心に決めた。(かなこ)

アルバートさん、本当にありがとうございました！！！！！！！！！！

## 和子さんのお話

ダッカのニューマーケットで感じた矛盾について和子さんの考えも伺ってみた。(さとみ)

<以下、和子さん>

私もバングラデシュに来るたびに矛盾は感じる。いつも強烈に思い出すのが、昔、独立公園で出会ったある子供のこと。その子はゴミための中からバナナを拾って恥ずかしそうに和子さんから見えないようにして食べていた。その子に自分は何もしてあげられなかった。そういうことが沢山ある。それから昔、友人が1人の子供に物をあげたとき、周りの子供たちがワッと集まってきてしまい、移動しても2人の周りにずっと着いてきた。皆に物やお金をあげられるわけではないという経験をそこでしたので、自分はBDPの活動を通して、バングラデシュの人々を少しでも救えたらいいと思って、そのやり方を貫くことに決めた。

### 【日本のホームレスとの違いについて】

日本とバングラデシュでは基本的な社会保障のレベルがまず違う。日本のホームレスは働こうと思えば働けるけど、お酒に逃げてしまっているような人もいる。けれど、バングラデシュでは、働きたくても働けない。けれど生きたいという思いが強い。そういう人が1日生きるため、その瞬間に食べるものを買うために物乞いしている。

### 【ダッカなど都市における物乞いについて】

バングラデシュの女性はまだ幼くても、家庭の食いぶちを減らすため、早くからお嫁に出されることが多い。そして、子供が生まれ、家庭を持っても、旦那さんが第2夫人を作ってしまう、買い物にダッカにきて、そのまま置き去りにされるという女性が少なくない。そのような女性はお金を得る術も、移動手段もなく、けれど子供を育てなければならないという現実の中で、物乞いになる。

## ハリーの質問に対するアルバートさんの答え

Q. 私たちは、物乞いの人にお金をあげるべきではないといわれていたけど、ニューマーケットで、お金をあげていたBDPスタッフがいた。それはなぜなのか？

A. お金をあげることは、こうしていけば生活できると彼らの自立を妨げることになり、仕事から逃げさせることで、ずっと物乞いをさせることになるからよくないこと。論理的に考えるとこうなのだが、人間はいつも論理的に行動できるわけではない。心情ゆえにあげてしまうこともある。外国から来た旅行者よりも、ベンガル人の方が、誰が本当にお金を必要としていて、施しを与えるべきなのかの区別をつけやすい。例えば、女性の場合、その社会的立場から考えて、お金をあげてしまうこともある。それがいいことであるわけではないが、心情ゆえにそうしてしまうこともある。

# 18日(木)

7:00 朝禱：輪島先生

8:00 朝食：ST最後の朝ごはん

9:30 STメンバーのみでの Wrap Up Discussion 開始

10:30 BDPスタッフを交えての Wrap Up Discussion

◎メンバーは口々に、「日本にいたら感じることをできなかったことを感じた」と言っていた。日本にいて頭だけで知っているのではなく、バングラデシュに来て、BDPスタッフや子供たち、地域の人など、一人一人の人と出会い、バングラデシュの自然や文化と出会い、目を背けたくなるような現実とも出会ったこと、その中で感じ考えたことが全て私たちの Study であったと皆感じていた。(さっちゃん)

◎BDP スタッフの皆さんは、「これからもバングラデシュのためにお祈りを続けてほしい。そして、是非何度もバングラデシュを訪れてほしい。それは、BDP スタッフ、先生、子供たちにとってとても大きな励ましとなるから」とおっしゃっていた。

◎プーパイルの12年前の姿と現在のボクシガンジがよく似ている。10年の差があるけれど、ダッカからこんなに遠いところで教育がなされるようになったことに感動するとともに、きょういくをから始めなくてはならない地域がまだまだあることを痛感。しかし、同時に「教育にショートカットはない」という言葉を新しい地で実践し続けているBDPの活動を見て、本当に素晴らしいと感じた。(和子さん)

◎かなこの質問：「最も原始の形の学校が見られてよかった。今後、建物がそろったとしたら、次のステップとしてはどうしていきたいのか？」

アルバートさんの回答：「BDPの教育はNon-formal educationであるので、地域の人たちの参与というものを非常に大切にしている。最初から大きな建物を建てようとは考えていない。土地に関しても、BDPが土地を買うのではなく、地域の寄付によって作られる。Micro creditのNGOは非常に大きいけれど、教育にたずさわるNGOはあまり多くない。BDPは教育こそ社会を変えていく最も大切な手段だと考えている。将来は中等教育へたどりつくことを展望している。」

12:30 昼食

\* ソンチョイさんが手配してくれたという、ドゥイをいただく。Aチームは2回目の、Bチームは初めてのドゥイ。

\* 最後に「あなたのことは、昔から知っているような気がします〜♪」とBDPスタッフが日本語で歌を歌ってくれた！感動☆☆

14:00 最後の宴会：歌にダンスに♪

\* オシムさん、最高！！オシムさんはボクシガンジで、ヘモントさんの歌に合わせてなら踊るといっていて、本当に踊ってくれました！

\* バングラデシュの人たちは、お酒を飲まなくても酔えちゃう！！（一同）

15:00 閉会礼拝：船戸先生

\* 人生には、自分の将来を決定するような「出会い」がある。

16:00 写真！写真！！写真！！ 16:40 「シャローム」を歌って再会を願う！！

16:45 プーバイル事務所、出発 17:20 ダッカ空港到着

20:55 離陸予定 →しかし、ビーマンは3時間遅れなり…。

\* 空港レストランで振替の食事をするも、もうプーバイルが懐かしい…。

23:?? 離陸

\* 飛行機の中の記憶はないに等しい。皆、とにかく寝てたっ！

12:00 成田到着

\* お祈りをして感謝！！また何回も集まろうね！！！！

### 全体を通したコメント

- ◎ 日本をたつ前の私の心がグレーだとしたら、今は、バングラデシュの夕日のような色だろうと思います。（ハリー）
- ◎ 私達の宿舍の井戸には、手を洗ったり歯を磨いたり水浴びの水をくんだり洗濯をしたりと生活上よく行く為、子供達もそこによく集まって来てくれました。慣れない手つきで井戸をこいでいると、代わって、ラジャックさんが大きな桶を水いっばいにしてくれたり、料理を作って下さっていた方が洗濯物を手際よく洗ってくれたり、さらには地元のまだ5~6才位の女の子や男の子が、細い腕で一生懸命水をこいでくれました。皆疲れる筈なのにと申し訳ない心持ちで「ドンノバット!!」という嬉しそうな笑顔を見せてくれました。そこには、「お客様だから」という思いよりも私は純粋なその人達の優しさを感じました。別れる日などはやはり井戸の周りで子供達からたくさん色鮮やかなきれいなお花を貰いました。そのお花は聖書にはさんで押し花にして日本に持って帰ってきています(^-^)\* 井戸の周りには色々な人が分け隔てなく集まってきて、昔の日本にもそういうのってあったんだろうけど、今はもう各家庭に水道がついていて…。人との交流の場が身近にあって、いつもみんながいるのを感じられるのがいいなと思いました。（洋子）
- ◎ かわいいお話：小学校を訪問した時、ヘモントさんが子供達に聞きました。「この人達は日本という、国から来てくれました。どうやってバングラデシュまで来たと思いますか？」子供達はこう答えました。「マイクロバス！」

13日の晩禱：のりこさん  
「人は持つば持つほど不自由になる」  
(マザーテレサ)

15日シェアリング：船戸先生  
「大恋愛しなきゃ人生語れない!!!」  
「大失恋もしなくちゃだめ!!!」

アルバートさん  
「チャンスはすぐに過ぎ去ってしまうから、  
一瞬一瞬を大切に生きなさい!!!」

ヘモントさん  
「君たちの肌の色は何色？  
彼らの肌の色とは違うよね？  
「でも、流れている血は同じ赤だよ。」

なつみ  
「私たちは生きることに  
鈍感になっていたの  
かもしれない」

## 名言集 & 迷言集

かな  
「現実を受け止める  
“強さ”を持ちたい」

ファルークさん

“Experience is important; Book is not enough.”

“We live under the same sky.”

“Language is important, but NOT VERY important.

The most important is HEART.”

幸せは自分で感じるもの、作り出すもの  
バングラデシュは貧しくない (not poor) 心が温かいし、愛がある

ヘモントさん  
「ネトロコナには  
オバケがいっぱいいる」  
「ネトロコナでは  
蜂蜜が取れる」

のりこさんのJOKE  
「洋子は、酔う子だったんだ。」

オシムさん  
「かずゆこしあーん♥」

# 印象に残ったこと

～いろいろな意味で・・・～

- ・ 子供たちの学ぶ姿勢の違いや目の輝き★子供達の笑顔☆
- ・ かずこさんとオシムさんの仲の良さ！
- ・ マシュートさんの冷えピタ!!!
- ・ やっぱ空港からプーバイルまでのタイヤパンク???
- ・ 儀子さんが爆笑しながら机の添え木を折った事！！
- ・ 犬やガチョウの乱入で、授業が中断すること
- ・ 教会で、一人の女の子が手にキスをして熱烈に歓迎してくれたこと
- ・ なつみのビーチサンダルが壊れたとき、一生懸命に直してくれたサミュール君☆
- ・ コンコさんが学校訪問で良き先生っぷりを発揮していたこと！
- ・ シークレットツアー？！  
(アルバートさん、オモルさん、のりこさん、輪島先生、さっちゃん、その、あいのり)  
※このとき、アルバートさんがいつもバングラデシュを考えてられるようにと、「歯ブラシ」をプレゼントしてくれた。紙タバコ、にも挑戦!!!
- ・ アリさんが、家計簿をつけてる姿！
- ・ ファルークさんの含み笑い
- ・ かずこさんがオシムさんの携帯がなる度に「誰？誰？」と聞いていたこと！奥さんみたい☆
- ・ 6時間車に乗り、風に打たれた後のファルークさんの髪についた癖→その後ファルークさんは水をつけて一生懸命直していた笑。
- ・ サイフルさんに電話越しに、オモルさんたちに教えてもらった愛の歌を歌ったら大爆笑されたこと。そして、それを見てエリックさんがご満悦してたこと
- ・ アルバートさんの Negative Questions！難！！
- ・ BDP スタッフの計り知れない優しさ！！

※注意！！カチャモリス※ (by あっこ)

カチャモリスを食べた後、きちんと手を洗ったつもりだったのに、コンタクトをつけるとき、すごく痛くて涙ポロポロだった。目のためにも、もう触れないようにしたい。塩をつけるとピーマンのようでなかなかおいしかった。激辛万歳！！

# バングラデシュの 子供たちと遊ぼう！

学校では、子供たちに出し物をする機会があり、また、近所の子供たちは私たちと遊ぶことをとても楽しみにしてくれています。A,B それぞれどんな出し物・遊びをしたのでしょうか？またどんな感想をもったのでしょうか？

## A チーム

学校

\* 「ボロボロガチェ」（「大きな栗の木の下で」のベンガル語版／アルバートさんが訳）  
「マタ・バフ・ハトゥ・ポン」（「あたま・かた・ひざ・ポン」のベンガル語版）を  
とにかくやりまくる。速さを変えていくと面白い。時にリコーダー、ピアノカ付で。

\* 折り紙：パクンチョ、コップを作る。みんなとても珍しそう。

\* 高学年に対しては、輪島先生が作ってきて下さった大きな写真を見せて、日本の文化を紹介する。コンコさんが通訳してくださった。

\* 高学年の子供たちには、色々質問もしてみた。

- ・ 何の科目が一番好きですか？ ベンガル語は好き、英語はあまり…。
- ・ 将来何になりたいですか？ 先生、医者、Officer など
- ・ いつ幸せを感じますか？ ベンガル語の詩を読んでいるとき
- ・ 日本の national food は何かという質問をされたので、おにぎりを紹介した。

◎ 黒板に書いたおにぎりの絵を、自分のノートに書き込んでくれたのが、嬉しかった。

\* 近所子供たちとは「大きな太鼓」「だるまさんが転んだ」「かごめかごめ」をやった。

「かごめかごめ」では「後ろの正面だ〜れ？」のときに「トマルナムキー？（お名前前は？）」と聞いて、名前を言ってもらおうという形にしてやってみた。

## B チーム

\*子供たちは、自分の名前を書くのが好きなので、書いてもらったり、名前を聞いて、カタカナでノートに書いてあげたりした。

\*片足けんけん：両手を後ろに組んで片足けんけんしながら、相手とぶつかり合い、最後まで残った人が勝ち。

\*なべそこぬけ：2人で手をつなぎ「なべなべそこぬけ」を歌いながら、くるっと旋回。後ろ向きでもう一度歌いながら、またくるっと元に戻る。

\*ビーチバレー：ビーチボールで輪になってバレーボール。

\*あやとり：子どもたちに特訓。最後にうまくできるようになって感激。

◎ 始めは"ほうき"を作ってみせて、興味を持ってくれました。なれない手つきで皆一生懸命練習し、それと同じくらいソノとハリーが一生懸命、あやとり先生として教えており、高度な鉄橋（バングラデシュではネット）があと少しで完成するところでお別れとなってしまいました。教え切れなかったのが悔やまれる！今頃ネットロコナの宿舎の周りではハリーが子供達にプレゼントした赤い毛糸が皆のワイイ手の中でほうきとなり宙を舞っているのかな（^^）（洋子）

◎ あやとりは指ぬきみたいな一見マジックっぽいのがバングラデシュにもあって男の子がそれやってみせてくれました！教えて欲しかったけど鼻の穴に指入れてやる芸だったからちょっと…。(その)

\*アルプスいちまんじゃく：宿舎の中の虫をいぶり出している為中に入れなかったとき、夕暮れの中、のりこさんの歌声(ベンガル語)で。ベンチに座りながらちょっとした夕涼み風?!

◎ 始めの簡単な振りのところを繰り返すだけだったけど、手遊びになれていないみたいでなかなか難しそうでした。手遊びはやっぱり女の子の方が好きなのかな?!

\*木の実を的にあてるゲーム、木の実のキャッチボール

\*子供のしているポーズを真似るとモノマネゲームみたいになって、いろんなポーズしてくれてかわいかった！

# バングラデシュの衣・食

## ◆衣 男性：＜パンジャビ＞＋＜パジャマ＞

- \* ひざ下くらいまでの長い上衣＋ズボン
- \* 輪島先生、あいのり、たなちゃんが着てました。

＜ルンギ＞→写真参照

- \* 長い巻きスカートみたいなもの
- \* 船戸先生、ファールークさん、オシムさんは寝るときとかにこれをはかれています。
- \* 最近は家にいるときにはルンギで、外に出るときはチノパンやジーンズという感じですが、農村や貧しい家庭の人々はいつもルンギをはいているみたいです。

◎ 観察したらダッカの街では、リキシャを「こいでいる」人はルンギをはいていて、「乗っている」人は普通のズボンってことが多かった。



女性：未婚者＝＜サロワ・カミューズ＞→洋子の絵参照

- \* ズボン（サロワ）に丈の長い上衣（カミューズ）  
＋大きいスカーフ（オロナ）
- \* 乾きが早くてびっくり！
- \* 種類がた～くさん！今は既婚者でもサロワ・カミューズを着たりする。
- \* 腕輪（チュリ）をつけておしゃれを倍増♪

既婚者＝＜サリー＞

- \* 5mくらい一枚の布を  
体に巻いていく！
- \* 今回サリーを着る機会は無かったけど、着たことのある孝子さんの話によれば、着せてもらうのは結構大変らしい。日本の着物を着るみたいな感じ。
- \* 上衣のおなかのところにある少しの隙間で風通しがいいようになっている。



## ◆食

### 朝

- \*ルティー：小麦粉で作った薄いクレープ状のナンみたいなもの。キッチンの人たちは、これを朝 4 時から作ってくれているそうです。しかもかなり難しいらしい。  
感謝！！



- \*野菜カレー：ルティーでくるんでいただきます
- \*卵：アヒルの卵も出た！殻は固め、黄身はまるやか、白身は透き通っていた。
- \*バナナ：何ともいえないおいしさ。ルティーで包めばベンガルスタイル?!
- \*パパイヤ：オレンジ色のメロンみたいで柔らかくておいしい。

### 昼、夜

- \*カレー：右手で食べます。一度の食事に 3～4 種類出てきます！ライムをかけたります。味はチキン、ビーフ、魚（揚げてあったりする）、キャベツなどの野菜、茄子、パパイヤ（B チーム）など
- \*サラダ：キュウリとトマト、塩をかけて食べる。
- \*ダルスープ：お豆のスープ、最後にご飯のうえにかけてお皿をきれいに☆
- \*ドゥイ：ヨーグルトみたいなもの。サワーでクープモジャ（とてもおいしい）★

### 常に

- \*ベンガルティー

<ベンガルティーの作り方>

用意するもの：水 200cc 牛乳 200cc 砂糖 20g 紅茶小さじ 1  
シナモン 1 片 カルダモン 1 個

- ① 鍋に水 200cc、シナモン、カルダモンを入れ沸騰させる。
- ② 紅茶を入れ再び沸騰させる
- ③ 牛乳 200cc を入れ沸かす
- ④ 砂糖を加え再び沸かし、こす

できあがり！！ですが、なかなか本場の味を出すのは難しいっ (><) お試しあれ！

# 船戸先生コーナー

ACEF事務局長の船戸先生は本当にすてきな方です。ということで、ここでは少し、船戸先生について書きたいと思います。

船戸先生の最近の疑問＝「かわいい」の定義についてだそうです。なぜかといえば、最近ツアーメンバーに自分がかawaiiといわれているから。確かに、今回のツアーメンバーもみんな、船戸先生かawaiiと言っていました！

先生は、同じ目線に立ち相手を理解することを大事にされている方です。高校を卒業した後も、自分から筑豊炭鉱に働きにいき、炭鉱の人々のボイラーでのつらい労働を一緒になって経験してきたそうです。東京神学大学をご卒業後、スラムや被差別部落で伝道をなさったそうですが、そのときも、心がけていたのは「どんな人にでもわかるように」神様の言葉をできるだけ易しく伝えることでした。

船戸先生とアジアとの出会いは、1967年にベトナムに派遣されたとき。ちょうど、ベトナム戦争の時で、アジアの教会が1つになってベトナムを救済しようという動きがありました。送り出す側の先生からは「日本の経済が戦争のおかげでよくなっている罪責感からすると、日本人がベトナムで一人くらい死んでくれた方がよい」と言われたそうです…今となつては笑って話されていましたが、聞いたときのショックはかなり大きかったそう。しかし、さすが船戸先生、ベトナム戦争中、お役目を果たして帰国されました。その後、JOCSでフィリピンなどアジアの国々をまわり、海外で働いている人たちの悩みを聞く仕事をしていたときに、Dr.マラカールに出会われ、SEPのCo-WorkerとしてのACEFの設立へと至りました。

そんな先生のモットーは、若いうちに、大恋愛も大失恋も経験しておくべきだということ。なぜかといえば、そういう経験を通して、相手（人間）を理解するということになるのだから、初めて「人生を語る」ようになるからです。そして、夫婦というのは、尊敬しあい、信頼しあうことが大事なのです！先生の大恋愛は？と聞いたところ、先生はかなりもてることが判明！大恋愛も大失恋も経験しているからこそ、船戸先生は偉大なのです。ここでは書ききれないので、何年後かに出版されるであろう、伊藤加奈子著「船戸良隆の歴史」をお読みいただきたい（笑）。頑張ります！

とにかく、皆さんご存知の通り、船戸先生は、奥の深い方です！！

一七一七主夫可破

# みんなの 感想文

～それぞれが感じた熱い思い～

※名簿順になっています※

## フィリピンの神父さん

船戸 良隆

第26回のスタディーツアーは、とてもよいスタディーツアーでした。メンバーの全員が、与えられた聖書の箇所についての奨励をととてもよく準備してきて、すばらしいお勧めをしてくださいました。一人一人のお話を記録して、残しておきたいほどでした。このように、しっかり準備が出来ていると、チーム全体を流れる「気」が、いかにも ACEF のスタディーツアーらしくなり、他のスタディーツアーには見られない素晴らしいものとなります。

今回のスタディーツアーで、私は二つのことが特に印象に残りました。第一は、ボクシガンジのマンディー族の教会でお目にかかったフィリピン人の神父さんです。日本人か、中国人のような面持ちで、私が「いつからバングラデシュにいらっしゃるのですか」と伺ったところ、笑いながら「バングラデシュが生まれる前から」とのこと。ベンガル語とマンディー語を駆使し、ベンガル語でミサをあげておられました。説教は、私たちのために、時々、英語を交えて語り、ちょうどレントにあたっていましたので、「時」を神様と隣人のために用いなさいと、極めて分かりやすく平易に話してくださいました。42箇所の教会、伝道所をホンダに乗って巡回しておられるとのこと。お年は、70歳。驚嘆のほかありませんでした。ただただ頭の下がる思いで、カトリック教会の奥深さを知ることができました。

次に、帰国一日前のことです。メンバーが、ニューマーケットに買い物に行きました。脚のない人が、いざり寄ってきて物乞いをする、やせこけた母親が幼い子どもを抱きかかえて、この子に食べ物をとって手を差し出す。この強烈な姿に接したメンバーは、帰りのマイクロバスの中で気分が悪くなり、ふらふらになって宿舎に着きました。日本では予想も出来ない現実がアジアにはあります。その現実を目をそむけることなく、しっかりと見つめ、私たちは何をなすべきかを考えることこそ、このスタディーツアーの目的であることを、今一度思わされました。

スタディ・ツアーを終えてはやひと月が経過した。帰国当初は、ツアーの新鮮な感動と記憶がしだいに失われていくことを恐れていた。しかしそれはまったくの杞憂であった。ますます感動と記憶が確かなものになり、新しい力を与えられていく。ツアーでのさまざまな経験が繰り返し反芻され、当時は経験しなかったことまで日々経験しているようにさえ思われるのである。その意味で、私のスタディ・ツアーは今なお続いている。この報告では、ツアーによって与えられ、ツアー後も考え続けているいくつかの問いを中心に書いてみたい。

### バングラデシュで起こった「解放」

一つ目の問いは、私自身と「日本」にかかわるものである。私は身体虚弱というほどではないが、見かけとは裏腹に、けっして頑健ではない。ほとんど常時と言ってもよいほど、原因不明の頭痛や腹痛に悩まされているし、年に四、五回は風邪で寝込んでしまう。

ところがバングラデシュに滞在している間、私は身体の不調から完全に解放されていた。もちろん、慣れない場所での緊張や、客人としての手厚い待遇、六時起床六時半ラジオ体操の規則正しい生活が体によかったのかもしれない。また、職場や家族など、日本でのあらゆる「しがらみ」から隔離されたことが幸いしたのかもしれない。

しかし、それだけにはとどまらない「何か」を、私は確かに感じている。私の心身は、多忙な日常を離れた「旅人」として解放されただけでなく、バングラデシュの生活および社会がもっている「何か」によって解き放たれていた。身近な例をひとつだけ挙げれば、食事を右手で直接食べるという習慣にも、このような解放をもたらす「何か」が秘められているように思う。箸やフォークが食べ物との距離をいかに遠くし、「食べる」という人間の根源的な行為を、いかにまどろっこしく、ストレスの多いものにしてしているか。それは帰国後初めて箸で食べた食事に強い違和感を覚えるまで、まったく思いもよらなかった視点であった。(機内食をフォークで食べているときには不思議と気づかなかった。)

ここで私の身に起こった「解放」は、まさしく日本の生活および社会における「抑圧」を指し示している。もちろん、バングラデシュが日本に比べて抑圧の少ない社会であると言うならば、とんでもない誤りをおかすことになる。バングラデシュの人々は、一週間程度の滞在では到底知ることのできないさまざまな抑圧と苦悩のただ中におかれているに違いない。しかし、バングラデシュにはまったく存在しない種類のストレスが、われわれの社会には満ちあふれているということもまた確かであるように思われる。いったいこのストレスとは何であり、それが存在しない社会とはどのような社会なのだろうかと問いかけずにはいられない。食事のたびに、あるいは頭痛と腹痛に襲われるたびに。

## 原理主義とたたかう教育

二つ目の問いは、ブーバイルに到着して早々に投げかけられた。教員としての役得で、アルバートさんは私をオフィスで特別に歓待され（学生のみなさんスママセン）、翌朝には近傍の散歩に連れ出してしてくれた。私が政治学と社会思想史の教師であることを知ったアルバートさんは、教育の社会的・歴史的使命について私と語り合えることを喜んで、大いに語ってくれた（人をおだてるのがうまいだけなのか、いや、私がノリやすいだけか）。

教育は自由と自立の精神を育み、政治的・社会的覚醒と解放を人々にもたらすこと、しかしそこに至るには長い年月が必要であり、けっして近道は存在しないこと。アルバートさんは途上国での初等・職業教育、私は先進国での女子高等教育と、それぞれに領域は異なっても、共通の課題にとりくむ「同志」であることがしだいに明らかになり、会話はおのずと熱くなる。その中でアルバートさんがふと口にしたことが、後になって私の中で重い「問い」に成長していった。それは、「ここでの教育はつねに原理主義とのたたかいを強いられている」という言葉であった。

アルバートさんが念頭においていたのは、いわゆる「イスラム原理主義」のことだけではなからう。少数のわかりやすい教条によりかかり、それを相対化する自由な視点を失っていくこと全般をアルバートさんは「原理主義」と呼んでいたものと思う。どんなに高度な教育も、自由と自立性を育てることに失敗すれば、人々をかえって原理主義へと駆り立ててしまう。いや、自由と自立性を育もうとした近代的な教育の重大な副作用が原理主義だったとすら言える。オウム真理教は高学歴者の集団であったし、統一協会は大学を重要な活動拠点としている。

イスラム教世界であれ、キリスト教世界であれ、あるいは日本においても、原理主義的な勢力は拡大の一途をたどっており、ここ最近の世界各地での暴力や戦争とも直結している。教育は、このような世界的な状況の中で、「自由と自立」をもたらす力を再度問われているのである。

## 近代化と伝統的多様性

ファルークさんとコンコーさんに率いられて訪れたボクシガンジ地区の村々では、モンゴロイド系であるガロ族の人々やその暮らしを垣間見ることができた。入母屋屋根と土壁の家は伝統的な日本家屋を思わせるものであった。それまであまり見かけなかった馬にもここではよく遭遇した。具体的にどこがどうとまでは言えないのだが、服装や化粧なども微妙に違うように見えた。そのような差異は、地区内の村落のあいだにも見られた。キリスト教色の濃い村落もあれば、モスクを中心にした村落もある、という具合である。

しかし、こうした多様な文化伝統を破壊するような力がこの地区にもじりじりと迫っていた。灌漑設備が整えられて、伝統的な農法はすでに駆逐されていたし、縫製工場や陶磁器工場が、ボクシガンジ地区のすぐ南にも建てられていた。

灌漑設備や工場は、たしかに村の生活を豊かにするであろうが、それによっていったん失われてしまった文化伝統の多様性を取り戻すことはむずかしい。しかし村人たちの立場からすれば、多様性が

伝統だなどということよりもまず、貧困からの脱却と安定した生活こそが切望されて当然であろう。

ファルークさんにこの問いを投げかけてみたところ、それはBDPの事業にとっても「最大の課題だ」と言っておられた。BDPの推進する教育は、貧困地域の近代化をもたらすと同時に、伝統的多様性の破壊をも導く可能性がある。近代化は予測を超えた速度で進み、教育によって伝統的多様性の貴さに人々が目覚めるころには、それが跡形もなく消え去っているということになりかねない。

おそらく世界各地で起こっているこのようなジレンマを、私たちはどのようにとらえ、解決していけばよいであろうか。これが第三の問いである。

### 隣人とは誰のことか

準備会やツアーでもたれた礼拝で、私は「隣人とは誰のことか」と問いかけた。それは自分自身にたいする問いかけでもあった。「自分以外のすべての人が隣人である」という答は、ひとりひとりの顔が見えない机上の空論であろう。隣人は、私たちが遣わされたそれぞれの場所で具体的に与えられるように思う。

スタディ・ツアーに参加するにいたった経緯は人によってさまざまである。しかしとにかく、数ある国と地域の中からバングラデシュに行くことになり、ボクシガンジやネトロコナに行くことになり、あのBDPスタッフたちと関わることになった。何がどう作用してそうなったのか、私たちには知りようがない。しかしそれがどうであっても、私たちには新しい隣人が与えられたことになる。ベンガル人が好きか嫌いか、付き合いやすいかどうか、私たちに利益をもたらすかどうか、そのような考慮をすっかり無意味にするようなひとつの「問い」として与えられた。「私たちには何ができるのか」という問いである。

このような「問い」として隣人が与えられた以上、私たちはそれぞれの答を探して奮闘する日々を送らざるをえない。こうしている間にも、ネトロコナ地区に厳しい現実が襲いかかっている。「問い」は待たなしに突きつけられているのである。

## 感謝することの大切さ

小林郷美

今回のスタディーツアーを通して私が一番強く感じたこと、それは感謝することの大切さでした。この1週間の間、朝は早くから、昼・夕は私達メンバーが学校訪問などから帰ってくると、食卓には温かくとてもおいしい食事が既に整えられていました。それらを前にする時にはいつも、私達のために料理を作ってくくださったコックさんや、食卓を整えてくださったゲストハウスのスタッフの方のことや、朝から日が暮れるまで田んぼで草取りをしていた人たちなどの姿が思い出され、そして現地の人にとっては贅沢すぎるほどのごちそうを毎日ふるまって頂いているということに心苦しさも感じ、食べ物一つ一つが本当にありがたく、感謝の気持ちが自然と湧いてきました。そして、今までその日食べるものが与えられているということに対してなんと何も思わないまま食べてきたのだろうか、と思い、感謝することの大切さをひしひしと感じました。

又、学校訪問では、生き生きとした表情で一生懸命に学ぶ純朴な子供たちにたくさん出会いました。それでもまだまだ学校に行けない子ども達はたくさんいるという話をBDPスタッフの方から聞きました。現に、ボクシガンジの地で私達のために給仕のお仕事をしていていたシュゾン君は実は12歳で、家のために働いているため学校に通うことができなかったそうなのです。私は小・中・高と教育を受けさせてもらってきて、更に今は大学にも行かせてもらっている。それなのに周りの環境や自分の怠慢さに流されて日々を送ってきた日本での自分を振り返り、これから日本に帰ったら、自分が与えられているものに感謝し、精一杯その中で生きようと強く思いました。

スタディーツアーを通して、豊かになることとそれによって忘れてしまうものということについても考えました。旅の中で、自分がとても恵まれていて、豊かであるということをおぼされる度、その豊かさがなんだか悪いことのような気がしていました。しかし、そんな時にアルバートさんや船戸先生がおっしゃってくださったことは、「豊かなことは神様の祝福であって素晴らしいこと。しかしそれに感謝することを忘れてはならない。そして与えられた場で精一杯働くことが感謝することになる。」ということでした。私は物質的に大変豊かな日本という国に生まれ、教育が当たり前のように与えられ、それらの豊かさがあまりにも当たり前だったために、感謝するという大切なことを忘れてしまいました。「自分が生きるということに対してどれだけ鈍感になってしまっていたかを

感じた。生きるということにもっと一生懸命にならなければいけない…。」

シェアリングでのなつみのこの言葉は今でも心に響いています。このスタディーツアーを“きっかけ”として、バングラデシュで出会った人、感じたことを忘れないように日々祈ること、そして感謝して精一杯生きること、そしてバングラデシュの子供たちに対して少しでもいいから自分のできることを続けていくこと、まずはそれから始めたいと思います。

私はこのバングラデシュスタディーツアーのなかで、日本ではできない貴重な体験をすることができた。そして、私たち一人一人の意見をシェアリングの時間に共有することによって、みんなでより深く考えることができたと思う。シェアリングの場では、主に「発展、教育そして自分自身の事」についての意見が多かったが、ニューマーケットに行ってから私にとって、「発展とは？」という問いが最も大きかった。ニューマーケットの光景でショックだったことは、急速に進んでいく現代化のなかでさらに開いてしまっている貧富の差、そして発展の過程で虐げられ、それでも一生懸命に生きる人々の様子だった。目の前にある飲み物や食べ物を買うことができない子供たちや赤ちゃんを抱っこした女性などがいる一方で、私たちは新しい服を着て、たくさんのお金を持ち、お土産を買っていることが苦しかった。発展した都会では物があっても、いや、あるからこそ発展の過程にあるバングラデシュの問題を顕著に表しているように感じた。発展とは何なのだろう？日本人の私から見ると農村と都市では、農村のほうが物や建物も少ないし、車や電気の普及が遅れているにもかかわらず豊かであるように見えた。(残念ながらバングラデッシュの人たちがどちらを好むかは今となっては分からないが。)「発展」の過程のなかでいまの日本にはなくなってしまった何かが魅力的に見せていたのだと思う。人それぞれ違うが、私が魅力的に感じた理由は、質素な生活、地域の人たちとの交流、そして彼らが持っていたたくましさや明るさと優しさに、私の中の“古きよき日本”のイメージと重なって見えたからだと思う。発展すると、物質的に豊かになり、その豊かさのなかで生活する人々に時間のゆとりを与え、そのおかげで余暇や趣味を楽しむこと、自分の生き方を自分で選択することを可能にしてくれる。しかし、一方で物質的な豊かさは、公害や環境破壊という問題の上になり立っていたり、心の貧しさを引き起こしたりする。何不自由なく生活していることに対する感謝の心を忘れてしまう。私自身もツアーに参加するまで、本やテレビを通して世界にはさまざまな国が存在していることを知っていても、いまの生活にあまり疑問や感謝を感じてはいなかった。最初の「発展とは？」問いに対して納得がいくような、すっきりした答えはまだ出ていない。簡単に良いとか悪いとかいえないけれど、正直な気持ちとして、ニューマーケットで見かけた人たちが衣食住に困らなくなり、もっと安定した生活がおくれるくらい経済的にも物質的にも豊かになってほしいと思った。最後に、このスタディーツアーの間ずっとサポートしてくださったACEFとBDPのスタッフの方々、一緒に悩んだり、考えたりしたメンバーのみんな、そしてこのツアーに参加することを許可してくれた両親に感謝したい。

## 「感謝することの大切さ」

矢島 美帆

私にとって、7日間のスタディーツアーは、本当に貴重な経験であり、忘れられない出来事となった。感じたこと、考えたことが多すぎて、頭の中が整理できずにいる。寺子屋を見学させていただき、子どもたちの声の大きさなどから学ぶ姿勢の違い、子どもたちの目の輝きの日本とのあまりの違いに圧倒され、そして“生きる”ということに対するエネルギーのようなものをすごく感じた。私が訪問したボクシガンジ地区は空気が澄んでいて、星はきれいで、様々な動物の声が聞こえ、ホテルも生まれて初めて見ることができた。すべてが純粋で自然であると感じた。そして、日本にいただけでは当たり前と思いきりすぎて気にも留めなかったことに、本当に感謝しなくてはならないということに気がついた。ダッカのニューマーケットで、物乞いの人や、今日生きるために必死で生活用品を売っている自分よりもずっと若い子どもたちを見て、日本での自分の生活にいかにも無駄が多く、怠慢であったかを痛感し、胸が締め付けられる思いがした。ご飯も満足に食べられなくて、現金収入のみのその日暮らしの生活が存在する、という現実を目の当たりにして、三食きちんと食べられること、水が使えること、服を着ていられること、帰る家があることに本当に感謝しなければならないと思った。私には自分の人生において選択肢がたくさんあり、決断ができるが、ここにいる人たちはそうではなく生死すら危うい。日本の物があふれている生活で、ほとんど何も活用しようとしていない自分に気づき、情けなくなり、さらに日本に帰ってからどのように生活していけばよいのか、何をしたらよいのか、ますますわからなくなった。バングラデシュでの経験を、ただ感じて考えるだけで終わらせるのではなく、この経験をきっかけにして今後の人生に生かすことが大切であると思ったし、バングラデシュで懸命に生きる人々に恥じない生き方をしなくてはならないと思う。おそらく、このことを一生心にとめて、考えていくことになると思う。具体的な答えなど全然見つからず、バングラデシュから帰国してまだ1週間しかたっていないのに、つい無駄な時間を過ごしてしまったり、ご飯を食べられるというありがたさをすでに忘れていた自分に気づき、船戸先生がおっしゃっていた、“人間は弱いものだから”という言葉に身にしみて感じている。けれど、そのことに気づいたときに、感謝の気持ちと、アルバートさんの“一瞬一瞬を大切に生きる”という言葉思い出し、その度に気を引き締めるしかないな、と今は思う。最後に、バングラデシュは日本のような間違った発展の仕方ではなく、精神的な豊かさが失われていない良い発展をしていくことを切に望む。

## 「出会うこと、見ること、感じ考えること、受け止めること」

伊藤加奈子

真実を知るには自分で出会うしか方法がない、でも、自分で見てきたことも、一部の事実であって全てではない。知らなきゃいけないことはもつともつと沢山ある。準備会のときに「スタディーツアーはきっかけ」ということを聞いたが、今、まさにそれを実感している。

あの一週間は、今まで生きてきた一週間の中で、一番考えた一週間だった。農村では、村の仲間同士の密な関係や、人々の暖かさを感じて、「人の幸せって何だろう?」「豊かさって何だろう?」「物があることや、便利なことは本当の幸せなのかな?」と自分の生活を振り返るような3日間を過ごした。また、学校に近づいていくと聞こえる、子供たちの元気な声に、思わず走り出したくなったり、笑みがこぼれたりした。ニーズに答えるってこういうことなんだと、同じ目線に立って物事を考えることの重要さを実感した。

ダッカでは、あからさまに富の不平等を見せつけられた。ニューマーケットの帰り、物乞いの子供たちやスラム街など、見るのがつらすぎて目をそむけてしまうこともあった。でも、実際に起こっていることなんだ。夢じゃないんだ。見ることも、与えられたチャンスで、チャンスがあるときには見なくちゃいけないんだ。そう自分に言い聞かせた。それでもまだ、目の前の光景が現実におこっていることであることを、なかなか信じることができなかった。また、同じ人間なのに、どうしてこんなにつらい生活を送らなくてはいけない人もいるのかと、憤りを覚えた。何もできない自分に悔しさ、不甲斐なさを感じた。何をしたらいいのか、見出せないことにいらいらした。何かを蹴り飛ばしたいような、今までに感じたことのない気持ちを持った。現実を「知ってしまった」という思いがした。今の自分には、とても大きすぎた。自分で感じたことすら、整理がついていない。これから、徐々に理解していこうと思う。

今回のスタディーツアーでは、自分で出会うこと、見ることの大切さを痛感した。そして、そこから何か感じること。「見て、考えなくてはいけないことがどんなに難しくても、逃げない強さ、受け止める強さを持って、その時の自分にできることを一生懸命やろう。いつでも、感謝する心を忘れないで。」これが、スタディーツアーに行った私の決意である。

バングラデシュ — 私は、この地で今までにないほど様々なことを感じ、考え、学び、時に笑い、時に泣きながら語り合い、とてとても貴重な体験をさせてもらった。

一生懸命勉強する子どもたち、裸で駆け回る子どもたち、BDPスタッフの優しさ、ゲストハウスの豪華さ、日ごと重さを増したシェアリング...それは書ききれないほどたくさんある。しかし、その中で最も衝撃が大きかったのは、ニューマーケットでのことである。それまでずっと田舎のボクシガンジにいて、それがバングラの全てだと思い込み、バングラを知ったような気になっていた。しかしダッカは違った。ビルディングやリキシャ、車も多い。そして、日本にあっても立派だと思えるくらいの高層ビルの真横に当たり前のように広がるスラム街。人が住んでいるとは思えない、とにかくボロボロの家...家とも呼べない...言葉がでなかった。私は、「貧富の差、あまりにも大きすぎる差」を「現実」として目にしたのだ。信号で車が止まれば、物乞いの人たち・物売りの人たちが集まってくる。障害を持つ子・お花を売りに来る子・裸の子どもを抱いた母親・老人...。何か違う、何かがおかしい、何か間違えている...ただひたすらそう思った。悲しさというよりも怒りだったと思う。でも、何か、何だかわからない。何もすることが出来ない...彼らを直視することさえ出来ない自分がいる。自分の弱さを感じた。そしてそれはニューマーケットに着いてから更に強く、重く、私にのしかかってきたのだ。「現実」を見たくない、もう知りたくない、知らずにいたらどんなに楽だろう、そう思った。彼らを直視できないままうつむきながら歩いていたその時、「1タカ... 1タカ...」という言葉が私の耳に入ってきた。1タカは、日本円で2円である。どうして? どうして2円に苦しむ人々がここにはこんなにいるの? 私、1円玉が道に落ちていたって、通りすぎちゃうよ... 私たちが買ったクッキーを見て、1枚でいい、1枚でいいから子どもにあげたい、と言う母親... 苦しい。ここはすごく苦しい。ボクシガンジにいた時は、緑が広がり、キラキラした目で勉強する子どもたちがいて、物質的には貧しくても人々の心の温かさがたくさんあった。豊かささえ感じていた。本当に豊かな気持ちになれた。でもここは違う。なんで? どうして? でも、物売りをしている子どもたちが友達同士で話している時の笑顔は、小学校で見た子どもたちの笑顔と何ら変わりはないということにも気づいた。かわいかった。

私は中学2年の時に初めて「ストリートチルドレン」を知り、家がなく、食べるものがなかったり、学校に通うことが出来ない子どもたちに関わりたくないとずっと思っていた。でもここに来てわかったこと、それは、日本には「オブラートにつつんだ」かのようにしかわからない、ということ。私は甘かったのだ。「現実」を目前にして、直視することすら出来ていないのだから。

今回スタディーツアーに参加して、「感謝する」ということ、「愛する」ということを本当に学べたと思う。そして、「生きる」ということに、いかに自分が鈍感になっていたかということも痛感した。「あなたたちは、現実を見て、受け止め、それを日本で伝える使命がある」「あなたたちはものすごく恵まれた環境を与えられている、この国には求めても与えられない子どもたちがたくさんいる。勉強したくても出来ない子どもたちがたくさんいる。だからあなたたちは一生懸命勉強しなくてはならない。」というアルバートさんの言葉がすごく胸に残っている。皆、必死に、一生懸命毎日を生きている。私も、もっとしっかり生きなくちゃ、学ばなくちゃ、感謝しなくちゃ、愛を持たなくちゃ! そう思った。

私は、こんなにもお土産の入っていないガラガラのスーツケースを持って帰ったことは今までなかったけれど、これほどまで心が満たされ、これほど1週間を長く感じた旅をしたこともなかった。小学校で男の子がくれた首飾りと、オシムさんがくれたかわいい子どもの写真、そして近所のお母さんが髪を結んでくれたゴム、コンコさんがプレゼントしてくれたネックレス、これらはとても大切なお土産であり、宝物でもある。私は、「一生忘れずに、バングラのことを考えて生きていく」という選択肢を選びたい。しっかりと自分の人生に生かしたい。なぜなら、スタディーツアーは終わりではなくて始まりであり、きっかけなのだから。

3年ぶりに訪れることのできたバングラデシュ。空港も街中も大きく変わっていることに時の流れを思いました。リキシャは決められた道しか走ることが出来ないし、ベビータクシーといわれる排気ガスが気になった乗り物の姿もダッカからなくなったと聞いていたことが現実になっていることに生活の変化を実感しました。店の広告も電気が多く使われて夜の街が明るいとも感じました。しかし、ダッカ郊外のプーバイルから約6時間の移動をして着いたボクシガンジはのどかな田園風景が広がり宿舍の電気は自家発電。夜空は真っ暗。インドまで3km。小高い丘に囲まれたこの場所はバングラデシュの大半が海拔数メートルであることを忘れそうになる不思議なところ。ガロといわれる人の村に多くのベンガル人も移り住んで学校では人として同じ子どもとして学んでいる様子に私の心は穏やかにされていきました。

バングラデシュの大きな町は近代的に変化してきているけれど、変わらない生活があることも知りました。バングラデシュの地で10数年前から始まっているBDPの学校の始まりは「木の下での青空教室」とACEF会員になってから聞いてはいたけれど、屋根と柱の学校（壁がない）で学んでいる生徒の姿に新しい芽を感じました。教育を受けさせたいという地域の大人の思いがこの学校になり、BDPと共に活動していく様子は学校を中心としたコミュニティ、日本では忘れられている地域で子どもを育てるといふ姿にみえました。

雨期になるとこの学校は使えなくなるので村の長老さん宅で勉強すると追う話を聞いて私は日本で学校建設の募金活動をしたらと短絡的に考えました。しかし、その村自身が本気で学校がいると考えて行動をしなくてはいけないこと。願えば物が与えられるという思いにしかならず、バングラデシュの人が自立をしていく応援ではなく妨げになる。神様のご計画で必ずそのと与えられるというアルバートさんの言葉に改めて自分はこれから何を？ 自分のできることをなんでしょうと思いました。バングラデシュという地からいただいた心や愛に感謝します。多くのバングラデシュの友に感謝します。

## 「スタディーツアーに合流して」

高崎 和子

今回バザーの買い付け後、スタディーツアーに、参加させていただきました。

Aチームに入れて頂き、ダッカから220Km離れたボクシガンジを訪問しました。

私が12年前にダッカから30Km離れたプーバイルを訪問した時と同じ授業風景でした。

学校の建物は無く木陰にごさをひき、子供たちは大きな声を出し元気に勉強していました。その時、私はアルバートさんが、BDPは愛と情熱を持って教育に携わっている。その基は、神の愛であると言われました。今この地で神様の業を励むBDPスタッフの姿を見る事ができました。

新しい地に、又一から種を播き育てていく、BDPの働きに感動しました。

又もう一つ嬉しかったことがありました。それは朝、晩の礼拝で若い方たちと一緒に聖書を読み共に語り分かち合えた事は、とても新鮮な気持ちで聞き入る事ができました。若い方の感性、感受性、に多くの事を学びました。

賛美歌57「ガリラヤの風かおる丘で」。皆でいつも歌ったガリラヤの風が耳に残っています。輪島さん、さとみさん、みほさん、あやのさん、なつみさん、かなさん、孝子さん、船戸先生、同じ時間を共有できた事を感謝しています。ありがとうございました。

皆さんのこと、バングラデシュの友達の事、私にとって大切な宝物になりました。

本当に参加できて良かったと心から思っています。ACEFの仲間です。いつまでも居てくださいね。

## 「扉を開ける」

井上 儀子

スタディーツアーのメンバーとは別行動で、BDP職業訓練学校のコンピュータークラスを訪れ、新しい女子クラスの生徒12名に、インタビューする機会が与えられました。昨年からはプーバイル地区で始められたのですが、首都ダッカではなく、農村地区で、男子だけではなく女子に、というBDP独自の発想で、バングラデシュとしても画期的な試みです。たくさんの応募者の中から選考されて入学しただけあって、はきはきと質問に答え、イスラム教の信仰心からブルカを被っている女性も、自分の意見をどうどうと述べて、バングラデシュの女性がこんなにも積極的であったのかと圧倒される思いでした。その中で、印象的だったのは、なぜこのコンピュータークラスに入学したのかという質問に、「自分の扉を開けたかった。」と発言した女性に目が留まりました。家でじっとしているのではなく、いろいろな差別を乗り越えるためにも、外国へのチャンスもあるかもしれない、そのために自分の扉を開けることから始めたかったと彼女は言いました。

スタディーツアー1週間の最後のシェアリングで、あるメンバーがこんな発言をしました。「今まで親が私のためによい道を用意してくれたが、これからは親からではなく、自分から向かっていって一つ一つ扉を開けていきたい。」彼女は村人から愛されて、親切にされて、今ここにいることの大事さに気がついた上での、大きな決断だったと私は感じました。

二人の境遇はまったく異なり、発言の背景もまったく違うのですが、「自分の扉を開ける」という言葉に不思議な魅力を感じました。「門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。」と聖書に書かれています。扉を開けるのは私たちなのです。私たちの心の扉を開け、チャンスの扉を開け、今必要としている人々の助けになれるように近づいていくことができればと思います。そして、たくさん子どもたちにチャンスを与え、子どもたちの人生を変えていこうと努力しているBDPと共に歩み続け、私たちの人生も豊かなものに変えられればと願います。

私はこの度、ACEF の第 26 回スタディーツアーに参加させていただきました。このスタディーツアーの僕の世界にひとつだけのお土産、それは「出会い」ではないかと思います。私はバングラデシュに行き、様々なものに出会いました。まず初めに、日本とはまったく違う生活様式というものに出会いました。例えば、トイレです。日本では紙のついた水洗式トイレが当たり前となっていますが、バングラではそうではありませんでした。まず、紙がありません。代わりに手を使います。また、日本のようにレバーをひねれば、すぐ水が流れるものでもありません。バケツで水をすくってそれで流します。また、食事は日本のように箸などは使わず、手で食べます。水も日本のように、水道をひねれば、水がすぐに出てくるようなものではなく、すべて井戸水です。このような状況に最初はとても、戸惑いました。特にトイレなどは最初行くことさえ、躊躇していました。しかし、次第に慣れ、平気になっていきました。バングラでのこのような経験は後に行くフィリピンでの旅にも生かされました。次に日本と異なる文化と人種に出会いました。バングラの人々は肌が黒く、ベンガル語を話し、イスラム教徒です。また、日本人のような格好をしている人は少なく、みんな、サルワカなどの民族衣装を着ています。日本では出会えない人々や街並みと出会えて新鮮でした。最後に人との出会いです。このバングラに行って、いろいろな人に出会いました。ACFF のスタッフの方々をはじめ、BDP のスタッフの方々、スタツアの仲間たち、そして、バングラの子供たちです。日本でただ、大学に行っているだけでは出会えない人たちとバングラで出会うことが出来ました。その出会いを通して、いろいろなことを学びました。バングラデシュの教育や経済の状況は当然として、自分自身の生き方や考え方、夢や将来の進路、大学生活についてなどいろいろなことを考えさせられ、学びました。バングラの現状について学びにきたのですが、バングラの様子や人々を通して自分というものを見直す機会を与えられたと思います。みなさんの笑顔を通して、元気や希望をもらったと思います。この出会いが直接、自分自身の人生を変えるものかどうかは分かりませんが、私の人生に大きな影響を与えたことは間違いありません。これからもバングラを忘れずに、日々生活していきたいと思っています。

## 「ビバ☆バングラ」

東京女子大学 吉井 昭子

帰国してからの自分が何だか違う、わずかながら成長した気がした。とにかく何にでもやたら感謝できる子と化していた。それは、今までの自分になくってはならないのに一番欠けていたモノだろう。もちろん、バングラに対する思いは180度変わった事は間違いない。

帰国後、家族や友達に会ったとき、「よく無事に帰れたね」とかなり言われた。無性に腹がたった。おそらくバングラに行く前の私と同じバングラに対するイメージからであろう。その人たちに対して私はできるだけ自分があるままに感じたバングラを話した。しかし、「バングラはこうで・・・、ああで・・・」という内容で自分がそこでした事を伝えることができなかつた気がする。それは、感じたままを受け止めて話ただけで、まだ自分で深く考えていなかったからだと痛感した。直接その地で肌で感じたことを考え、自分自身についても考えるというとてもとても大切な事を充分にしていなかつた。

しかし、毎晩行われたシェアリングでは、みんなの感じたことや考えをシェアする事で、その人をさらに知ることができ、一人では気づかなかつた事に気づき、それを考える事によって新たな自分に出会えた気がする。本当に同じ物を食べ、同じ物を見たりしても、一人ひとり受ける刺激は違う事を感じた。

さらに、とても出会いの多い一週間だった。特に、ネトロコナでの三日間はバングラの人たちのあふれんばかりのキラキラと輝いたステキな笑顔に出会えた。私はよく顔がコワイとかツンとしていると言われるので、彼らの笑顔を見て、世界には心の幸せ・喜びをこんなにもストレートに表す事のできる人がたくさんいる事に衝撃をうけた。みんな心がとても豊かなのだと思う。キラキラ、キラキラ身体全体で笑っていた。

ここまで、特に印象深かつた事を綴ってきたが、まとめる事ができないのが本心である。バングラで経験した事全てが何事にも換え難い私の宝物であり、スタディーである。この宝物を無駄にしないためにも、感謝できる子プラス考えられる子と化し、自分自身をはじめ将来の事やさまざまな事を追究していきたい。さらに、バングラの人たちにもりこさんにも負けないくらいのキラキラ笑顔も自分のモノにできちゃえば素敵★無敵なんだけどねえ〜（笑）

## 「日本に帰って思ったこと」

清水 苑

私は、このツアーに行く前はバングラデシュに特別な感情はもっていませんでした。ただ、色々な国に行って多くの人とふれあいたいという観光気分からこのツアーの参加を決めました。私にはバングラデシュに知り合いもいないし、バングラデシュの位置を知ったのもツアーの募集を見てからでした。だから、バングラデシュのために何かしたいとか、国際協力をしたいという思いはありませんでした。しかしツアーを終えた今は違います。もっともっとバングラデシュのことを知って、地域の人々から心から必要とされ感謝されているBDPのために少しでも力になりたいと思っています。実際にネトロコナの学校で子供達が生き生きととても楽しそうに勉強する姿を見たから、学校の大切さを知り、BDPのスタッフの人と触れ合ったからBDPの活動の重要性や村の人達に本当に必要とされていることを知りました。また近所に住む子供達のニコニコとした本当に素敵な笑顔や、スタッフの人達の気配り、やさしさ、おもしろさを見たからバングラデシュを好きになりました。その国に一人でも力になりたいと思える人がいるから国際協力というものができるとも思います。私たち一人一人が、世界各国を回って、各国に一人ずつでも困っていたら助けたい、笑顔を見れば嬉しくなるという友人をつくるのが出来たら、国際協力というのはうまくいくし、まして戦争など起こるはずがないと思います。けれどそんなことは出来ません。私がバングラデシュに行けたのだから、私が幸運だったからだと思います。だから私は、できるだけ多くの人にバングラデシュのこと、とても素敵な笑顔をした人達がいるということを知らせなければならぬのだと思います。また、特別な感情を持たずに行ったバングラデシュでも現地の人と触れ合ったことによって、バングラデシュが好きになったように、私がまだ位置や名前も知らない国にもきっと困っていたら助けたいと思う仲間がいるのだと思います。実際に出会った人に力になりたいと思ったり、まだ出会っていないだけで、出会ったら力になりたいと思うだろう人に協力することが国際協力であると感じました。バングラデシュの人達に出会ったことによって、私は世界の多くの人々と共に学校に行けない子供達の役に立ちたいと思うようになりました。また、力になりたい、協力したいと思ったけれど、大事なものはその中身だと思いました。バングラデシュの人が困っているなら助けたいし、力になりたい、まだ学校に行けない子供達に学校に行かせてあげられるよう協力したいと思うけれど、実際に何がバングラデシュの人のためになるのか私には分かりません。バングラデシュの発展というのが、日本のような発展であってはならないと思うし、あの美しい田園風景を公害などで破壊するものであってはならないと思うからです。私はバングラデシュを見てきたというつもりで帰ってきたけれど、家族に話をしている途中で、美しい田園風景で働く子供がどういう境遇で働いているのか、発展していくダッカの街をバングラデシュの人がどのように思っているのかなど、バングラデシュの詳しいことを全く理解していないことに気付かされました。バングラデシュが現在どんな状況かというの私もほんの一部しか見れていません。これからバングラデシュのことをもっと調べ、できればもう一度行ってもっとよく知らなければ、バングラデシュという国をよくするために役立つことは出来ないと思いました。日本も世界もどんどん発展していています。私達はどれが良い発展でどれが悪い発展か慎重に見極めなければならないと思いました。また、バングラデシュの国を良くするためには教育が必要であるというBDPの方針は素晴らしいけれど、何を教えるべきなのかということ真剣に考えなくてはならないと思いました。

このツアーのメンバーや、BDPのスタッフ、エイセフのスタッフの方々が素晴らしい考えをもってたくさん刺激くれたので、色々なことを考えることができました。バングラデシュに行けたこと、多くの人に出会えたことを心から感謝しています。

たった一週間の日々だった。その中で私は多くの人々に出会い、交流し、そして別れた。その間に考えたことはたくさんあった。

例えばそれは、教育の機会の有無について。日本人はほぼ全ての人に教育の機会が与えられている。その状況は当たり前のことではない、ということ。バングラデシュの子供たちは、私たちから見れば劣悪な環境下で学んでいる。さらには、学べない子供たちはもっと多いのだ。

農業のこれからについて。人類は、アメリカ・日本を始めとして全世界規模で農薬を使うようになり、その余波はバングラの地にも届いている。農薬の使用は、いずれは土地の養分を奪い、殺虫剤の使用は作物自身、そして食べる人の人体を侵す。今日、明日、そして五年後はまだ青いままの田畑がバングラには広がっているだろう。しかし、その先はどうなのだろうか。枯れゆく土地となってしまうのだろうか。豊かさについて。豊かなことが幸福というわけではない、ということに改めて気づいた。しかし、その一方で日々の糧を得られない人々は幸福なのだろうか。それでも、私たちは彼らにささやかな幸せを見つけ、と言えるのだろうか。

施しについて。現地の人に直接何か物を与えることは、あまり好ましくないのだ、というのが暗黙の了解だった。では、私たちがしている寄付はそれに含まれないのだろうか。募金はどうなるのか。私は、あの国が好きになったし、少なくとも日本国民の標準よりはバングラデシュという国を知ってしまった。だからこそ何かバングラの人々にしてあげたいと思うが、それは先進国に住む私の驕りなのだろうか。

平等について。世界は不平等だったと思う。だけれど、平等だとも思う。人の性で、誰かと比べたがるという衝動があるが、それこそが不平等という言葉を生んだ源なのだろうか。人であること、三大欲求の先を求めてしまうことが不平等を生むのだろうか。しかし、今の私には物乞いとして生きることは出来ないし、一生を農業のみに捧げることも出来ない。そう考えてしまうことはいけないのだろうか。

彼の地で、自分の頭を振り絞って精一杯考え、そして周りの人と意見を交換したりもした。しかし、それでも自分なりの答えすら出なかった。自分がどうするべきか、ということについてはますます分からなくなった。結局、安全に生きられる場所で、何一つ生きる術を掬がれることなく日本での日常生活を送っている。所詮、私にとってバングラでの生活は非日常に過ぎなかったのだろうか。バングラ人の日常を、自分にとっての非日常の一角としてしか覗けなかったのだろうか。とは言え、私はもはや贅沢や余暇なしでは生きられないだろうし、彼らの日常を自分の日常として生きては行けないだろう。

そんな折、私が訪れたバングラのネトロコナで竜巻が発生し、BDPの学校が壊れ、多くの人が亡くなったというニュースを聞いた。私にはどうすることもできない。祈るしかないのだろうか。また、悶々と考え続ける日々は続く。

## 「バングラデシュで出会ったこと」

榊原洋子

ACEF のスタディーツアーに参加できて、本当によかったと心から思います。そして支えて下さった多くの方々に感謝します。今回のスタディーツアーでバングラデシュに行きたいと自分で言い出したものの不安でやはりやめておけばよかったかもしれないとまで思いました。でもやめなくて本当によかったと思います…。

今回この報告書をかくにあたって前回参加した先輩方の感想文をよみました。行く前によんだ時には頭で理解していたつもりでしたが改めて読むとその思いのひとつひとつに共感でき、懐かしさで涙がでました。バングラデシュでは本当に多くのことを学びました。

ダッカについてから車で移動し、私達のチームは北部のネトロコナというところに行きました。そこは果てしなく田園風景が続き、きれいな色の花が咲き、子供達は皆元気に走り回っていました。貧しい国だと聞いていた私はそんな様子にどこかへんが貧しいんだろう、と力車に揺られているとそう感じてしまうほどでした。しかし帰国前にダッカに戻り、街に買い物にいったら、私はその日ほど「貧富の差」というものを強く感じたことはないと思いました。ネトロコナでの自然と共存した暮らし、訪れた学校は木にトタンがはってあるだけでそんな中で子供達は大きな声で先生の質問に応え、鉛筆をにぎりしめ一生懸命勉強していました。

しかしダッカの街にはたくさんの方がいました。綺麗な人がいました。綺麗なものを売っている店がありました。しかしそのすぐ隣には貧しい人がいました。足のない老人がいました。物乞いをするお母さんがいました。ネトロコナやプーバイルの宿舎の近くではみることのない光景でした。その時私達はお金をたくさん持っていたのに、何もすることができませんでした。多くの疑問を消化できずもどかしさと矛盾に皆が苦しみました。また、帰りの空港に向かうとき、広がる田園地帯に似合わない位電線がはりめぐらされていることに気がつきました。バングラに行く前、私は発展することは人々が豊かになることだからよいことであると考えていましたが、本当にそれだけでいいのかという疑問もうまれました。

日本に帰ってきて、自分の国の豊かさ、恵まれた自分のすぐ近くにあった幸せを、以前より強く感じました。たまたま私は日本という国に生まれてバングラを訪れたことをとても不思議に感じます。BDP のスタッフが話してくれたように、私達にはなるべく多くの人に話すことが使命なのではないかと感じています。バングラでであった光景、体験、そして何よりスタッフの温かさや話、一緒に行った仲間達とともに語り合ったこと、のりこさんの笑顔は私の宝物となりました。バングラデシュに愛おしさを感じます。

## 「赤坂奈々、バングラデシュの人々に出会った・・・。」

赤坂 奈々

「アマル ナム ナナ」(わたしの名前はナナです。)とバングラデシュの人たちに言うと、みんなクスクス笑っていました。前もって、儀子さんが『ナナ』とはベンガル語で『おじいさん』という意味だと教えていただいていたので、だから、みんなにあだ名で呼んでもうらおうかな、とも考えました。でも、バングラデシュの人たちが、私のことを「おじいさんのナナだ!」と名前を覚えてくれるのなら、別に笑われてもいいや、と思うことにしました。

ある日、私が子どもたちに自己紹介していたら、イリアスさんが「ナナ ダリ ナイ」と私に言ってきました。すると、今までにないくらい子どもたちは笑っていました。『ダリ』とは『ひげ』という意味で、バングラデシュのおじいさんは、みんな立派なひげがあるのに、私にはひげがない、ということを書いていたのです。この意味を知って、私もみんなと一緒に笑ってしまいました。これをきっかけに村の子どもたちとも、BDPのスタッフとも仲良くなることができました。

ネトロコナでは5つの学校を訪問しました。みんな、まっすぐ前を見て、先生の話聞いていて、彼らの集中力には驚かされました。ある Feeder School を訪れたとき、ヘモントさんが子どもたちに話していた言葉に私は感動しました。

「きみたちと、彼ら(私たち日本人)の肌の色はちがうね。でも、からだの中を流れている血の色は同じ赤だよ。だから、みんな仲間なんだよ。」

みんな仲間、その言葉がうれしくてたまりませんでした。

バングラデシュは、世界で貧しい国の一つと言われています。確かに、日本と比べてみると、そうだと思います。しかし、バングラデシュの人々は日本人の持っていないもの、日本人が失ったものを持っていると私は思います。マザー・テレサはかつて、こう言いました。「物を持てば持つほど、人は貧しくなる。」

まさに、私自身がこの言葉に恐いぐらいに当てはまっているな、と思いました。バングラデシュの人々は、貧しいけれど、とても豊かな心の持ち主です。彼らの太陽のようにまぶしい笑顔と、豊かで温かな心、本当に素晴らしいと思います。バングラデシュは素敵な国だと私は思います。しかし、貧富の差、衛生面などといった、改善しなければならない点もあります。そのような国とこれからどのように手を取り合っていくかが私自身の課題でもあり、日本の課題でもあると私は思います。

今の私がやるべきこと、それは“Study hard.” 今は、一生懸命勉強して、知識を増やし、内面的な部分も磨いて、そしてまた、バングラデシュに行きたいです。

最後に、お母さん、おばあちゃん、私をACEFのスタディーツアーに参加させてくれて、ありがとうございました。

## 第 26 回 ACEF STUDY TOUR (2004 SPRING)

### ～MEMBERS～

#### A チーム (ボクシガンジ地区)

船戸 良隆 (船戸先生、よし?)	FUNATO, Yoshitaka	ACEF 事務局長
輪島 達郎 (しびれくらげ)	WAJIMA, Tatsuro	青山女子短大教員
小林 郷美 (さっちゃん)	KOBAYASHI, Satomi	ICU 教育学科 3 年
石崎 綾乃 (あやの)	ISHIZAKI, Ayano	ICU 社会科学科 1 年
矢島 美帆 (みほ)	YAJIMA, Miho	中央大学法学部 1 年
伊藤 加奈子 (びよん)	ITO, Kanako	ICU 社会科学科 1 年
江原 奈津美 (なつみ)	EBARA, Natsumi	東京女子大学社会 1 年
高石 孝子 (たかこさん)	TAKAISHI, Takako	ACEF ボランティア
高崎 和子 (かずこさん)	TAKASAKI, Kazuko	ACEF バザー委員

#### B チーム (ネトロコナ地区)

井上 儀子 (のりこさん)	INOUE, Noriko	ACEF 事務局員
田中 裕介 (たなちゃん)	TANAKA, Yusuke	ICU 社会科学科 3 年
吉井 昭子 (あっこ)	YOSHII, Akiko	東京女子大社会 2 年
清水 苑 (その)	SHIMIZU, Sono	東京女子大地域 2 年
相原 典佳 (あいのり)	AIHARA, Noriyoshi	ICU 社会科学科 1 年
榊原 洋子 (ようこ)	SAKAKIBARA, Yoko	青山女子短大教養学科
赤坂 奈々 (はりー)	AKASAKA, Nana	文化女子大付属杉並高校 2 年

## Bangladesh に寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。



個人会員 年額 1口 5,000円

団体会員 年額 1口 50,000円

学生会員 年額 1口 2,000円

一時寄付 随時 金額自由

郵便振替 00100-0-185540

アジアキリスト教教育基金

## 会員募集

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

TEL. & FAX. 03-3208-1925

E-mail: acef@rg7.so-net.ne.jp

<http://www.bluerain.fm/acef>